

日本とメキシコの友好400年
未来に向けて



御宿町国際交流協会

— 目 次 —

序 文	3
I 調査報告	
日本とメキシコ 御宿友好 400 年 ～日墨友好 400 年の軌跡～	4
ドン・ロドリゴがスペイン国王に送った岩和田の報告（日本見聞記）	14
甦るドン・ロドリゴの生誕地と霊廟	18
～生誕地テカマチャルコ～	18
～霊廟サンフランシスコ修道院～	20
～テカマチャルコ, プエブラの歴史概観～	21
スペイン国王に捧げたドン・ロドリゴの一生	25
サンフランシスコ号「Q&A」	28
御宿一日西墨 400 年の歩み ～メキシコ・スペインとの友好親善～	33
II 周知啓蒙活動	
日本における活動	35
メキシコにおける活動	36
あとがき	38

発行年月日：2011 年 3 月 20 日

編集／発行：御宿町国際交流協会

(〒299-5192) 千葉県夷隅郡御宿町須賀 1522

(事務局) 御宿町役場 産業観光課内

Tel : 0470-68-2513

禁無断複写掲載

一 序 文 一

房総半島の南に位置し太平洋に臨む千葉県御宿町は、美しい砂浜が続く童謡「月の沙漠」の発祥地である。また高級食材の鮑や伊勢えびが漁れ多くの観光客が訪れる町である。漁業の中心岩和田地区は古くから海女（海士）漁業が盛んで、大和朝廷の時代に“調”という形で干鮑を納めていたと言われる。この岩和田村に大事件が起こったのは400年前の1609年9月30日のことであった。フィリピン臨時総督一行を乗せたスペインのガレオン船「サン・フランシスコ号」が、フィリピンのマニラ（当時はスペインの植民地）からヌエバ・エスパーニャ（現在のメキシコで当時はスペインの植民地で副王領）に帰航中に、台風により岩和田沖で遭難、田尻海岸に漂着した。この時、岩和田村の海女や漁師たちの活躍で、乗員373人中、317人が救出された。この救出が、日本とメキシコ友好のきっかけとなり、今日、御宿が「日墨友好発祥の地」といわれる所以である。以来両国は長い歴史の中で“友好の絆”を紡いでいき、2009年には日本で、2010年にはメキシコで400周年を記念する行事が盛大に行われた。

御宿町は「人類愛」の尊さを誇りにしている町である。先人の偉業が脈々と語り継がれ、節目の年には友好行事を行ってきた。

そして400周年を記念として、「日西墨比4カ国友好元年」をテーマとして、調査報告書（日墨400年の軌跡）の編集と、周知啓蒙活動（日本及びメキシコにおいて）を行うことにした。

調査報告書の編集委員は夫々本業をもち歴史学者ばかりではなかった。400周年の歴史をどうしたらよいものか。この町の歴史に根付く“宝”の山に踏み入ったことに、どのように整理し纏めていくかを大変な思いに囚われたものであった。それを編集に駆りたてたのは先人たちの心情を想い、今日まで時代の節目に取り組んでくれた先輩諸氏に少しでも喜んでもらえる「紙碑」をつくりたいとの情熱と新しい時代の若者に伝えたいとの願いであった。

御宿町岩和田の田尻海岸には「ドン・ロドリゴ上陸の碑」が建っている。そして80年前には太平洋を眼下にした岩和田の高台に、日西墨三カ国による、白亜の「日西墨三国交通発祥記念之碑」が建立された。そして400周年には、メキシコ国から“人類愛の象徴”としてブロンズ像の「抱擁」が寄贈され、訪れる人々に友好の歴史の“しるべ”となり、人気を博している。

本書は学術書ではない。長い歴史の中で太平洋を越えた人間と人間の絆を感じていただければ幸いである。

周知啓蒙活動は、次々と浮かぶ企画が膨れ上がり、6カ月の短期間に日本とメキシコの地において合計11回の活動を行うことができた。本活動は二カ国に亘る大変な事業であったが、友好発祥の地御宿を取り上げ、積極的に活動したことで、日本においては改めて史実を知らせることができ、メキシコにおいては多くの人的交流ができ、報道もされた。そして400年間一度も知られざるドン・ロドリゴの生誕地テカマチャルコ市と霊廟サンフランシスコ修道院に初めて訪れることにより、調査と友好ができたことは新しい歴史の一ページをつくれたことは意義深いものであった。

御宿町は、2010年9月30日に「日西墨友好の絆記念日」の条例を制定した。毎年9月30日は、“絆の日”として国際交流を更に深めていくことを思うばかりである。

御宿国際交流協会／編集委員会

México 2010 : Bicentenario de la Independencia, Centenario de la Revolución Mexicana
Cuarto Centenario entre Japón y México (Onjyuku 400 años de Amistad)
メキシコ 2010 : 独立 200 周年・メキシコ革命 100 周年
日墨交流 400 周年 (御宿友好 400 周年)

日本とメキシコ 御宿友好 400 年

～日墨友好 400 年の軌跡～

柳沼孝一郎 (神田外語大学教授)

はじめに

千葉県御宿町岩和田、太平洋を臨む岬の突端に、「メキシコ塔」とも呼ばれる「日西墨三国交通発祥記念碑」の塔が建っている。現在のメキシコがヌエバ・エスパーニャ (「新しいスペイン」の意味) と呼ばれ、フィリピンとともにスペインの植民地であった時代、1609 年 9 月 30 日にスペインの大型帆船ガレオン船「サン・フランシスコ号」が上総 (千葉県房総半島) の沖で座礁・沈没した。乗船していたメキシコのフィリピン臨時総督ロドリゴ・デ・ビベロ (Rodrigo de Vivero) 以下 317 名は岩和田田尻海岸に漂着、大多喜城主・本多忠朝から手厚い救援を受け、このできごとがきっかけとなり、日本・メキシコ・スペイン間の交流が具体的に開始され、支倉常長遣欧使節から鎖国にいたるまで使節団を派遣するなど華々しい関係が展開された。この塔はその国際親交を祈念して昭和 3 (1928) 年 10 月 1 日に建立されたものである。これが縁で、1978 年に、御宿町とメキシコ太平洋岸のアカプルコ市、大多喜町とクエルナバカ市がそれぞれ姉妹都市を提携している。

1. スペイン帝国の東アジア進出

1492 年にクリストファー・コロンブス (クリストバル・コロン) が新大陸に到達したのち、1521 年にエルナン・コルテスが率いるスペイン軍によって征服されたアステカ王国はヌエバ・エスパーニャと命名され、スペイン領アメリカの中核となった。1522 年、マゼラン隊が世界一周航海を成功させスペインに帰還すると、スペイン王室は東洋の香料諸島を領有化する目的でロアイサ、ビリャロボス、ウルダネタ、レガスピなどで編成する遠征隊を派遣、スペインの東アジア進出が開始された。レイテ島の島々をスペイン皇太子フェリペ (後のフェリペ II 世) の名にちなみフィリピナス (フィリピン) と命名し、スペイン領有を宣言、以後 250 年間にわたりマニラとアカプルコの間で「太平洋ガレオン船貿易」が運営され、スペイン帝国は太平洋における覇権を確立していった。

2. 秀吉の時代とスペイン

1584 年 (天正 12 年) にスペイン人宣教師の一行が九州・平戸に避難入港、外国貿易を渴望する領主は領内布教と交易船来航を要請した。これに触発されてマニラでは日本布教熱が高まった。一方、1549 年 (天文 18 年) に来日したザビエル (San Francisco Javier : 聖フランシスコ・ザビエル) をはじめポルトガル側の宣教師はすでに布教活動を展開していた。戦国時代に軍事・財政の強化が重視され、「南蛮貿易」が脚光を浴びるようになり、とりわけ九州の諸大名は交易船の領内入港誘致を考え、自ら「切

支丹大名」となって積極的な態度で臨んだ。このような布教と貿易の不可分な関係のなかで、ポルトガル・イエズス会は日本伝道と対日貿易において絶対的な地位を築いていった。しかし、スペイン王室の保護下にあったフランシスコ会などが日本布教に参画する事態は、日本布教を事実上独占していたポルトガル・イエズス会にとっては放置できるものではなかった。その結果、日本における布教権をめぐるイベリア両国の間に軋轢が生じ、対立抗争は激しさを増していった。

九州平定遠征の折、長崎を中心に現状を目の当たりにした豊臣秀吉は宣教師を危険分子と見て取った。その結果が1587年(天正15年)に公布された「キリスト教禁令」(伴天連追放令)であった。一方、マニラから伝道団が次々と来日し布教活動を展開していった。しかし秀吉は、キリスト教禁令を顧みない強引な活動に、布教は日本国土征服の前提という警戒心を抱くようになった。こうした時に、アカプルコへ向けて航海中のガレオン船サン・フェリペ(San Felipe)号が土佐・浦戸に漂着、船荷一切と乗員の所持金が没収された。この捕奪事件は、布教は日本征服の前提とする危機感をより現実的なものにした。もはや布教活動は黙認できるものではなく、キリシタン弾圧はさらに厳しさを増し、「長崎二十六聖人殉教」にまで発展した。殉教者のなかに、メキシコ最初の聖人サン・フェリペ・デ・ヘススの名で知られ、メキシコ市のメトロポリタン大聖堂に祀られているメキシコ・プエブラ出身のフェリペ・デ・ラス・カサスがいる。

メキシコ市からアカプルコ街道を一時間、やがて常春の地クエルナバカに着く。街の中心には、かつてアジア布教に太平洋を渡った宣教師たちが航海の無事を祈ったカテドラルがあり、フランシスコ会の修道院の聖堂には壁一面に描かれた長崎大殉教の大壁画(“EMPERADOR TAYCOSAMA MANDO MARTIRIZAR POR…”(太閤様(秀吉)は殉教を命じられた…))がある。

3. 家康と総督ロドリゴ・デ・ビベロの『協定案』

海外貿易の促進にあたった家康は「布教と貿易」の不可分の関係を考え、正式にはキリスト教を認めなかったもののなかば放任する態度で臨んだ。一方、オランダやイギリスの新教国が日本に進出しつつあった。スペイン王室は事態を重視し、ヌエバ・エスパーニャ副王ルイス・デ・ベラスコの甥にあたるロドリゴ・デ・ビベロをマニラ臨時総督に任命した。ビベロ総督はマニラに赴任すると早々に、1581年にスペインから独立したオランダ人が幕府において優位を占めつつある事態を打開すべく幕府に接近を試みたが、待望のマニラ交易も実現するにはいたらなかった。

ビベロ総督がヌエバ・エスパーニャ(メキシコ)に帰国の途上、乗船したサン・フランシスコ号は暴風雨に遭い、上総国(千葉県)岩和田の海岸に漂着した。ビベロ総督はじめ生存者317名は大多喜城主・本多忠朝から手厚い救援を受け、ビベロ一行は秀忠と会見したのちに駿府へ赴き、1609年10月29日に家康と謁見した。数日後、ビベロに対して帰国用の船舶と支度金が提示され、見返りとしてスペイン人銀精錬技師50名の派遣斡旋が要請された。

それに対してビベロは次のような『協定案』(Capitulaciones, 1609年12月20日付)を提示した。スペインおよびヌエバ・エスパーニャと通商を開始するための条項として、①スペイン人に対して関東に港を提供し、宣教師の駐留を許可する、②スペイン交易船を保護し優遇する、③交易船に対して糧食を供給し職人を提供する、④スペイン国王が日本に派遣する大使および随員、同行する司祭を厚遇し、商品の自由販売を認める、ことを挙げた。

鉱山開発および技術援助に関しては、⑤100名ないし200名のスペイン人鉱夫を日本に派遣するよう

フェリペ王に申請するが、スペイン人鉱夫によって発見された鉱山については、精錬した銀の半額をスペイン人鉱夫の分とし、残り半分を日本皇帝（家康）と主君フェリペ王で二分する、⑥各鉱山に居住するスペイン人に対してスペイン大使が司法権を有し、刑罰を司る、⑦オランダ人を日本国から追放する、などの条項が盛り込まれた。ヌエバ・エスパーニャとの直接貿易を熱望する家康は、日本とヌエバ・エスパーニャの平和と貿易を協定する『平和協定条項』（慶長 15 年 1 月 9 日（1610 年 2 月 2 日）付）を作成し、使節の派遣を決定した。

使節の随行員には田中勝介、朱屋玄成ら 23 名の京都商人が選ばれ、日本で建造された黒船サン・ブエナベントゥーラ号は 1610 年 8 月 1 日（慶長 15 年 6 月 13 日）に浦賀を出帆、同年 10 月 27 日にメキシコ太平洋岸に到着、11 月 13 日にアカプルコに安着した。

4. ビスカイノー返礼使節と家康

ヌエバ・エスパーニャ副王ベラスコは日本からの使節一行を歓待し、スペイン国王およびヌエバ・エスパーニャ副王は答礼使節を日本に派遣することを決め、その大使に探検航海の功労者セバ스티アン・ビスカイノーを任命した。公的には返礼使節とされたが、日本の東方海上の「金銀島」（日本の東方海上 380-390 レグア、北緯 37 度 2 分の 1 に位置するとされる伝説上の島）の調査発見、日本沿岸の測量調査の実施、キリスト教容認運動が主な任務であった。幕府が主張した日本とヌエバ・エスパーニャの直接通商についても討議されたが、徳川政権下ではキリスト教の布教が容認されておらず、一連のガレオン船拿捕事件から貿易船の日本寄航の安全性が問われ、不確実な対日直接貿易よりはむしろ既成のフィリピン貿易をさらに活用すべきとされ、最終結論には至らなかった。こうしてビスカイノー使節はじめフランシスコ会士ら総員 61 名のほか日本人商人からなる遣日使節団一行は、1611 年 3 月 22 日にサン・フランシスコ号にてアカプルコを出港、同年 6 月 10 日に浦賀に到着した。

ビスカイノー使節は、のちに支倉遣欧使節に同行するルイス・ソテロ師を通訳として従え、秀忠と家康に謁見したのち、本来の任務に着手すると同時に日本からのオランダ人放逐の説得に奔走した。ところが、ビスカイノーが伊達政宗の援助の下に沿岸調査を実施していた間に、江戸ではオランダ人のヤン・ヨーステン（八重洲）や家康の外交諮問役でイギリス人のウィリアム・アダムス（三浦按針）らによる反スペイン運動が展開されていた。ビスカイノーの奥州沿岸測量調査は金銀島発見のためのもので、日本攻略の準備の何ものでもないことを幕臣に力説していたのである。金銀島発見の試行は結果として幕府の心証を害したうえに、従来のスペイン人に対する疑心をより現実的なものにし、幕府首脳部に深い不信感を植えつけた。すべての途を絶たれたビスカイノーは政宗とソテロの約定に基づきいわゆる「支倉六右衛門常長慶長遣欧使節」の船に同乗し、失意のうちに帰国の途についたのであった。

5. 支倉常長遣欧使節の遙かなる旅—鎖国への序章

「奥州王」伊達政宗と宣教師ルイス・ソテロの間で、スペインおよびローマへの使節派遣が計画され、幕府の使節としてソテロが同行することが取り決められた。遣使にあたっては幕府とも緊密な連絡を取り合いながら周到に準備が進められ、伊達正宗の使節に支倉六右衛門常長が選ばれた。こうして慶長遣欧使節の総勢 180 人あまりの一行は日本船サン・ファン・パウティスタ号に乗り組み、慶長 18 年 9 月 15 日（1613 年 10 月 27 日）に牡鹿半島の月ノ浦を出帆、太平洋の彼方、ヌエバ・エスパーニャのアカプルコを目指し大海原に乗り出し、1614 年 1 月 25 日にアカプルコに到着した。

支倉一行はその後、銀山の町タスコを經由し、道中、「クエルナバカ大聖堂」に立ち寄り、3月4日、羽織・袴に身をつつみ、馬上姿でメキシコ市に入城した。かつてアステカ王国の都として栄華を誇った湖上の都市テノチティランには12の鐘の音が響き渡ったという。一行はヌエバ・エスパニーヤ副王によって用意された「タイルの家」と呼ばれる、ロドリゴ・デ・ビベロの縁者ビベロ伯爵家が所有する邸宅に逗留し、折しも聖週間（セマナ・サンタ）の荘厳な儀式を目の当たりにし、支倉使節の洗礼の秘跡はマドリードで行うこととされ、従者ら78名ははす向かいにある当時はフランシスコ会本部であった聖フランシスコ聖堂で洗礼を受けた。その後の支倉使節の運命は、遠藤周作『侍』（新潮文庫）にあますところなく描かれているが、一行はヌエバ・エスパニーヤで歓迎され、1614年6月10日、サン・ファン・デ・ウルア（ベラクルス）港で乗船、7月23日にハバナ（キューバ）に到着、10月5日、カディスとともに新大陸貿易の玄関口として活況を呈するサン・ルーカル・デ・バラメダ港に到着した。グアダルキビル川をさかのぼり、コリア・デル・リオに滞在したのち、使節一行はソテロの故郷セビーリャでは大歓迎を受けた。新大陸貿易を管理運営する王室の「通商院（カサ・デ・コントラタシオン）」が設置され、新大陸からの富が結集し、繁栄を欲しいままにするスペイン随一の都セビーリャの栄華に一行は驚愕した。1615年1月30日にフェリペ国王の厳かな謁見を受け、宣教師派遣の依頼も受け入れられ、スペインとの友好通商関係の樹立に向けて第一歩が踏み出されたかに侍には映った。2月17日にフェリペ国王臨席のもと洗礼式が執り行われ、「フェリペ・フランシスコ・ハセクラ」の名が授けられた。11月1日にはローマで教皇パウロ5世に謁見し、使節としての大任をまっとうできたかに侍には思えた。しかし、ルソンやマカオとの貿易を断絶する準備として幕府がイギリスとの通商を認め、日本におけるキリスト教徒迫害の情報が入ると、使節一行は孤立を余儀なくされ、以後は失意の、絶望の帰路を彷徨うことになった。

その後、1623年（元和9年）にマニラ総督府から使節が訪日したが、幕府からは謁見が許されなかったばかりか、キリスト教信仰は厳禁され、宣教師が渡来し宗教を広めることは国法に背くもので、今後マニラとの一切の関係を断絶する旨の方針が到達され、フィリピンとの通商はもとよりヌエバ・エスパニーヤさらにはスペインとの関係は途絶してしまった。

6. 近代の日本とメキシコ 「日墨友好通商航海条約」

長年にわたり断絶していた日本とメキシコの関係は「メキシコ金星天体観測隊」によって再開された。1874年に横浜で観測を実施した隊長のフランシスコ・ディアス・コバルビアスはその報告書『天体観測日本旅行記』のなかで、急速な発展を遂げる維新直後の近代日本を多方面から考察・分析した上で、日本とメキシコの直接貿易、日本人のメキシコ移民の導入によってもたらされる両国の利益を説き、そのための両国間の外交関係樹立を力説した。コバルビアスの提唱はメキシコ政府の関心を呼んだ。同じ頃、外交官として欧州諸国に駐在していたアンヘル・ヌニェス・オルテガが最初の日墨関係史の研究書『17世紀における墨日政治通商関係史』を著した。これらがきっかけとなり、メキシコ政府内に「太平洋岸に通じる鉄道を建設し、清、日本の両帝国と通商関係を樹立する」案が構想され、東洋の物産を直接メキシコに輸送するためにメキシコとアジア間を就航する「メキシコ太平洋汽船会社」が設立されて、日墨条約案が醸成されていった。

明治政府が条約改正に着手して間もない1882年9月21日、ワシントンの米国國務省内で、臨時代理公使の高平小五郎はメキシコ公使マティアス・ロメロと会談する機会があった。ロメロ公使は、慶長年

間に伊達政宗が派遣したローマへの使節一行がメキシコに逗留したことなど、当時の日本とヌエバ・エスパーニャの交流について触れ、日本とメキシコの通商開始および日墨条約の締結を打診した。その当時メキシコは政治的安定を確立し、飛躍的な経済発展を遂げて外国貿易を拡大しつつあった。それから一週間の後、ロメロ公使は前述のヌニェス・オルテガの著書を添えて、メキシコ政府からの正式な申し出として条約締結を提示した。日本外務省はただちにその検討に入ったが、条約改正の折衝中ということもあって、条約改正が達成されるまではいかなる国とも条約は結べないという結論であった。これに対してメキシコ政府は、欧州諸国政府が日本政府から獲得した権益を要求せずに日本と条約を締結する用意があると回答した。ところが日本政府の条約改正会議が無期延期となり、そのためにメキシコ政府からの申し出は立ち消えになってしまった。

こうした時に再びメキシコ政府から条約締結の申し出があった。伊藤博文は早々に最恵国待遇を基本とした条約締結の交渉を開始し、大隈重信外務大臣は特命全権公使・陸奥宗光にロメロ公使と折衝させ、こうして日本とメキシコの両国間で条約締結交渉が再開された。そして折衝のすえ、「日本国の法権に服する条件の下にメキシコ国民に対し日本の内地を開放する」という日本政府が提唱した「機密特別條款」が決め手となり、1888年（明治21年）11月30日にワシントンにおいて、両国特命全権公使の陸奥宗光とマティアス・ロメロの間で「日墨友好通商航海条約」が調印された。本条約は、相互に治外法権と関税権の拘束を認めず、相互に内地開放するという、日本が達成できた最初の完全平等条約であった。本条約を足がかりに日本政府は列強国と交渉に臨み、悲願であった条約改正が達成された。その意味で本条約の歴史的意義は高く評価されてよい。1889年6月に批准書を交換、7月18日に条約が交付され、1891年には建野郷三が特命全権公使としてポルフィリオ・ディアス大統領に信任状を奉呈、同時に日本国領事館が開設され（1897年に公使館に昇格）、他方、メキシコの特命全権公使ホセ・マルティン・ラスコンは日本国天皇に謁見、東京に公使館が設置され、こうして日本とメキシコの両国関係は新たな時代を迎えた。その延長線上で「榎本武揚メキシコ殖民団」が構想され、実践されたのである。

7. 榎本武揚メキシコ殖民団

19世紀のラテンアメリカでは寡頭支配体制のもと欧米諸国をモデルとした「近代化」が模索された。メキシコではポルフィリオ・ディアス大統領の下、未開地を開拓し、農業および鉱業の振興のために外国資本を導入して国内産業を促進し、欧米市場に直結した資源開発や特定の産物を栽培・輸出するいわゆるモノカルチャー経済部門を中心に空前の経済発展を遂げ、近代化と経済開発が大々的に進められた。こうした産業開発にともない、不足する労働力を外国人労働者で充足させる外国労働者移民を誘致する移民奨励策が推進された。

一方、当時の日本では、農村部や都市部における困窮民の救済や急増する人口が深刻な問題となり、その解消策として海外殖民が国家的事業として推進された。榎本武揚は外務大臣に就任すると同時に外務省に「移民課」を設置して定住移民を送り出す候補地を模索した。こうした時に米サンフランシスコ日本領事館から、日本人殖民地建設の候補地としてメキシコが最も有望であるという報告があった。さらに対アジア直接貿易を促進させるために、大西洋と太平洋を結ぶ「テワンテペック鉄道」建設が計画され、鉄道敷設工事のために日本人労働者が求められた。さらには鉄道が開通し、「メキシコ太平洋汽船会社」の定期船が就航するようになれば、メキシコ南部のチアパス州およびテワンテペック地峡には日本人殖民地が建設されるであろうと取り沙汰された。

榎本はメキシコ殖民計画を実現化するための推進母体として「殖民協会」を設立した。調査団が派遣され、コーヒー栽培が盛んなメキシコ南部チアパス州ソコムスコ郡エスキントラが最適地であるとの結論に達し、同地の官有地を買い入れ、コーヒー栽培に就業する日本人を移住殖民させるため「墨国移住組合」を設立、6万5000町歩の官有地払い下げの合意とともに「日墨拓殖会社」に改組しメキシコ殖民を具体化した。こうして「榎本メキシコ殖民団」の一行36名は1897年（明治30年）3月24日に横浜港を出港した。同年5月19日、槍を先頭に、米や味噌、醤油樽を担いだ異様なでたちの日本人集団がエスキントラに辿り着いた。コーヒー栽培を基盤とした「日本人殖民地」建設の理想に燃えた「榎本殖民団」の一行である。この計画的な集団移住は、日本人ペルー移住に先立つこと2年、ブラジル移住より11年早い、日本人の中南米移住の先駆けとなった歴史的な移住であった。

8. 日墨協働会社の理念と実践—メキシコ南部チアパス州に息づく日本文化

榎本殖民地は短期間で崩壊してしまうが、残された入植者のうち宮城県宮城農学校卒の有志が中心となって「日墨協働会社」（Compañía Japonesa Mexicana, Sociedad Cooperativa）を創設し、殖民地経営を存続させた。日墨協働会社は、私有財産を厳禁し、共同体精神に立脚したきわめて社会主義的な色彩の濃い共同体組織であったが、特筆すべきは、社員子女の教育のために「教育積立金」を制度化し、日系二世の児童教育を最重視して「学校教育」を実践したことである。エスキントラの隣り村、アカコヤグアの近くを流れる川畔に「アウロラ（暁）小学校」を建設し、日本語習得と修練のため5歳になった児童を学校に寄宿させ、日本から教師を招聘し、日本の教育指導要領に従い、日本から教科書を取り寄せ、日本語で授業を行った。さらにユニークなのは流暢な日本語の習得を考え「ローマ字教育」を実践したことである。日本とメキシコの両国を祖国とする児童たちが、日墨両国の文化を理解し、将来において日本とメキシコの架け橋となるべく子供たちに教育を授けるためであった。

日墨協働会社は水力発電所、橋梁や水路工事など公共事業も興し地域社会に貢献したが、なかでも「西和辞典」の編纂は特筆すべき文化事業である。日本人入植者のなかにはスペイン語が理解できる者は誰ひとりいなかった。彼らは言語の壁にぶつかり、意志の疎通も思うにまかせず、言語不通のまま異文化世界のなかで開拓生活を余儀なくされた。何よりも「スペイン語・日本語辞典」が求められた。しかし当時の日本には、「西班牙会話篇」（1905年発行）という語学入門書があるのみで、本格的な辞典は皆無であった。そこで日墨協働会社が独自に辞書編纂に着手し、1925年（大正14年）に「西日辞典（DICCIONARIO ESPAÑOL—JAPONÉS）」を出版した。見出し語数が約3万語、1107ページにおよぶ本文、巻末付録にスペイン語の動詞活用表を載せた本格的な辞典である。発行部数約2000部、チアパスの緑豊かな自然を彷彿とさせる美しい深緑色の表紙、「幻の西和辞典」といわれる所以である。語義の日本語訳にローマ字でルビがふられ、漢字の読み書きが不自由な人、スペイン語から日本語を学ぼうとする人にも配慮した「西日辞典」は、日本語教育の将来をも考慮に入れて編纂された辞書として高く評価されてよい。未知の文化のなかで生きるため、言語の障壁が最も深刻な問題であった。この一冊の辞書はチアパスに眠る日本人の血と汗の結晶であり、ボロボロになるまで使って、まるで聖書のようなものだった、と日系人のあいだで語り継がれている。

その他、内村鑑三の門下生である日本人キリスト教徒がキリスト教精神に基づく理想郷の建設を目的として1900年にチアパスに入植した。日本人教徒はインディオ農民に無教会キリスト教を説き、彼らの食生活の改善と向上に奔走し、識字運動にも尽力した。さらには日本人排斥の気運が高まりつつあつ

た米国からチアパスに入植した日本人は商業活動の他に地域の医療活動に専心し、地元「ベニト・フアレス小学校」を建設、町に寄贈し地域教育に貢献した。こうしてチアパス州の日本人入植者は着実に地域社会に根を張り、のちにメキシコ日系社会が形成される大きな基盤となった。

1997年に開催された「日本人メキシコ移住100周年」記念事業の一環として、榎本殖民団が最初に到着したタパチュラに「日墨文化会館」が、エスキントラには「文化交流会館江戸村」がそれぞれ建設された。日系人のみなならず、周辺地域のメキシコ人市民、とりわけ青少年のための相互理解と健全な交流の場に、というメキシコ日系人の強い願いから建設された会館は、日本語教室、料理教室、生け花、茶道、日舞、水墨画など日本の伝統文化に触れる講習用の多目的教室、宿泊設備、厨房設備などが完備された会館になっている。

9. メキシコの殖民産業振興政策と日本人移民

榎本メキシコ殖民はディアス政権の海外輸出向けのコーヒー産業振興策のもとで実施された。砂糖産業、油田開発、生産地と港を接続するための鉄道建設など、メキシコ政府の経済産業開発政策に日本側が労働力を提供するという形で、移民斡旋会社扱いによる相当数の日本人労働者が「契約移民」としてメキシコに送出された。明治34年(1901)11月に「熊本移民合資会社」はメキシコ北部コアウィラ州にあるラス・エスペランサス炭鉱やフエンテ炭鉱に82人の労働者を送ったが、明治40年(1907)10月まで12回にわたり計1,242人の邦人をメキシコに輸送した。また「東洋移民合資会社」は、同37年(1904)にボレオ銅山に500人の労働者を送り出したのをはじめ、同40年10月までに12回にわたり、ラス・エスペランサス炭鉱を中心に計3,048人の日本人契約労働者を輸送した。また「大陸殖民合資会社」は同37年からメキシコ移民の斡旋を開始、同40年5月まで10回にわたり、コーヒー・プランテーション、麻栽培地あるいは麻製造工場、メキシコ南部のオアハケーニャ砂糖耕地などを中心に4,407人の契約移民をメキシコに斡旋した。その他、メキシコ中央鉄道コリマ支線工事にも多くの日本人労働者が就労した。同工事は米国系の土地建設会社が請け負っていたが、大陸殖民合資会社と契約を交わし、総勢1,992人の日本人が同支線工事に送り出された。

その後、日本人のメキシコ移住は、1907年に「日米紳士協約」が締結され、日本人のメキシコ渡航が事実上中断されるまで、外国人移民を積極的に受け入れ、産業開発を促進させるディアス政権の政策のもとで、とりわけ移民斡旋会社の取扱いによって1万人以上の日本人労働者が送出され、その多くは砂糖耕地、鉄道建設工事そして炭鉱や鉱山、綿花栽培地などで就労したのである。

10. 戦後の日墨関係—パートナーシップの構築に向けて

太平洋戦争勃発と同時にメキシコが連合国軍への加盟を余儀なくされると、日墨両国の国交は断絶され、米墨の国境地帯および海岸地方に在留する日本人はグアダハラ市とメキシコ市に集団強制立ち退きが命じられた。メキシコ日系社会の日系児童のための日本語学園はいずれも解体されたが、強制移転先で日本語学園が設立された。メキシコ政府が戦前の日系人のメキシコ国に対する貢献を高く評価し、日本人の活動に何ら制約を設けず、日本語教育についても戦前同様に続行することが許可されたからである。

戦後の日本とメキシコは新たな関係に入った。1945年にメキシコ政府は日本との交戦状態の終結を宣言、日本人の強制集結と日本人の財産凍結を解除した。1948年にはメキシコの国連大使が国連総会にお

いて対日講和条約の早期締結を訴えた。日本の早期国連加盟を提唱したことを機に両国の国交が回復され、同時にメキシコ政府は戦時中に凍結していた日本公使館の財産を全額日本に返還、これを基に日墨両国の友好関係のさらなる促進を目的として1956年に「日墨協会」が設立され、両国の文化交流の場としてメキシコ市に「日墨文化会館」が建設された。

さらに、のちにノーベル文学賞を受賞した詩人のオクタビオ・パス（当時、二等書記官）が在日公館長臨時代理として東京に着任した。1954年には「日墨文化協定」が調印され、経済面では日本からの投資、技術移転さらには日本人技術者のメキシコ移住が開始され、1957年には日本貿易振興会（JETRO）によって「第1回日本産業見本市」がメキシコ市で開催された。1960年代は、日本企業のメキシコ進出にともない経済関係がより盛んに展開され、1964年に「メキシコ日本商工会議所」が発足し、1964年の東京オリンピックの後に1968年に開催されたメキシコ・オリンピックを機に両国の友好関係はより進展した。1969年1月30日には、関税・輸出入・為替などに関する事項について最恵国待遇を相互に保障する「通商に関する日本国とメキシコ合衆国との間の協定」すなわち「日墨通商協定」が調印され、日本企業のメキシコ市場進出がさらに活発化した。1971年には「日墨研修生・学生等交流計画」が発足し、100名ずつの研修生を相互に交換する政府交換留学制度が開始された。1974年9月には、日墨両国の教育課程に準拠し、「日本コース」と「メキシコ・コース」の2コースで組織する、世界でも類を見ない国際校「日本メキシコ学院（Liceo Mexicano Japonés）」が設立された。

1987年5月には「日本人メキシコ移住90周年記念祭」が、1988年には「日墨修好通商条約100周年」が開催され、1997年5月8日から21日まで「日本人メキシコ移住100周年記念祭」がメキシコで盛大に開催されたのを機に「日墨関係の新たな100年の幕開け」と位置づけられ、エルネスト・セディーヨ大統領の訪日を機に「日本メキシコ自由貿易協定（FTA：Free Trade Agreement）」が構想された。2002年10月27日、小泉首相（当時）とビセンテ・フォックス大統領（当時）はメキシコのロス・カボスにおいて会談、両国間の経済連携を一層強化することの重要性について議論し、協定締結に向けて交渉を開始する考えで一致した。その後、2003年3月12日に日墨経済連携について大筋で合意に達し、2004年9月17日にメキシコ市にて、小泉内閣総理大臣とフォックス・メキシコ合衆国大統領は「経済上の連携の強化に関する日本国とメキシコ合衆国との間の協定」いわゆる「日本メキシコ経済連携協定（EPA：Economic Partnership Agreement）」に署名した。

日墨経済連携協定は、「両国の新時代における戦略的パートナーシップを発展させる上で重要な一歩であり、二国間の経済関係を新しい次元へ高める基盤となるもの」（小泉首相、フォックス大統領共同表明）として、両国間の新たな関係構築に向けた手段とその象徴と位置づけられた。また、この協定は、農産物のみならず関税の軽減・撤廃さらには経済協力問題などを含む包括的な協定で、当時のフェルナンド・カレナス経済相が「第三世代の自由貿易協定となるもので、相互に補完的な協定」と評したように画期的な自由貿易協定であった。こうして日墨両国関係に新しい時代を開く日墨経済連携協定は2004年11月に日本の国会で、翌12月にはメキシコ上院でそれぞれ承認され、2005年4月1日に発効された。同協定は日本としてはシンガポールに次ぐ2番目の自由貿易協定であるが、同協定の発効後の貿易の動向は、日墨貿易総額で見ると、2004年が約7,962億円、05年が約10,447億円、06年が約14,078億円、07年が約15,756億円、08年が約14,263億円であった。米州自由貿易地域（FTAA：Free Trade Area of the Americas）構想あるいは世界貿易機関（WTO）による多国間協定が議論される国際情勢のなかで、同協定がいかに機能し、両国にとってどのように位置づけられるのか、今後の動向が注目されている。

メキシコはペルーやチリとならんで、アジア太平洋経済協力会議（APEC）の加盟国でもあり、「太平洋の時代」ともいわれる 21 世紀において、天然資源や鉱物資源そして海洋資源に恵まれた経済資源大国の一翼を担うメキシコと日本の新たな関係の構築が模索されている。日墨経済連携協定による経済・技術協力を有機的かつ恒久的に機能させるためには「相互理解」が必須である。相互に認めあい、理解しようとする姿勢に裏付けられた真摯な態度に立脚した協力関係でなければならない。そのためにも、さらなる文化交流事業および人的交流をより一層展開する必要がある。とりわけ、日墨両国の戦略的グローバル・パートナーシップの強化に貢献できるような若手人材の育成を目的とした、日墨両国政府による「日墨グローバル・パートナーシップ研修計画」（従来の、「日墨研修生・学生等交流計画」を改称）の今後の発展と活性化も大いに期待されている。21 世紀の日本とメキシコの関係において、両国に期待されているのはまさにそうした健全かつ発展的な関係を、そしてパートナーシップを構築することなのである。

そして日墨交流 400 周年を迎えた翌年の 2010 年 1 月 31 日にメキシコのフェリペ・カルデロン大統領が訪日、2 月 1 日には鳩山由紀夫首相と会談が持たれ、「二国間の友好関係がさらなる高みに引き上げられている」との認識で一致し、日墨経済連携協定については、日墨両国の貿易・投資拡大および中小企業の進出、さらに二国間協力の強化について同協定が大きく貢献していることを評価した上で、「メキシコが日本の中南米における輸出先として主要な地位を占めていること、日本がアジア太平洋地域における最大の対メキシコ投資国であること、メキシコにとっては第三位の貿易相手国であること」を認識し、両国の競争力をさらに高める上で大きな潜在力を発揮する同協定について、その戦略的重要性が再確認された。両首脳は、グローバルな視点から日墨両国間の戦略的パートナーシップを進展させることで一致し、これによって、「国際の平和及び安全、両国国民の安寧並びに科学の発展のための二国間のパートナーシップの将来について方向性」が示された。

参考文献および主要論文

- ・柳沼孝一郎「スペイン語圏と日本 大洋をこえて」全 12 編、日本放送出版協会『NHKテレビ・スペイン語会話』（2003 年 4 月～ 2004 年 3 月）
 - （その 1）大航海時代と日本—スペイン帝国の東アジア進出
 - （その 2）信長の時代とスペイン—ザビエルの日本渡来 天正遣欧少年使節団
 - （その 3）南蛮人の見た日本—南蛮文化 フロイスの『日欧文化比較論』
 - （その 4）太平洋ガレオン船貿易—アジア・アメリカ・ヨーロッパ三大陸の連携とアジア交易
 - （その 5）秀吉の時代とスペイン—キリシタン追放令 秀吉とスペイン・マニラ総督府
 - （その 6）家康の時代とスペイン—家康とスペイン・マニラ総督府
 - （その 7）徳川幕府とヌエバ・エスパーニャ副王府—宣教師ソテロと幕府の『平和協定条項』
 - （その 8）支倉常長遣欧使節の旅立ち—ビスカーノの金銀島探検と反スペイン運動
 - （その 9）支倉常長遣欧使節の遙かなる旅—悲運の使節 鎖国への序章
 - （その 10）近代日本とメキシコ—近代化の模索と日墨関係
 - （その 11）戦前期の日本とラテンアメリカ—近代日本の海外移住政策 中南米移住の軌跡

- (その12) 21世紀の日本とラテンアメリカパートナーシップの構築にむけて
- 「日本とメキシコ 1～日墨関係のあけぼの～」、日本放送協会『NHK ラジオ・スペイン語講座』(1994年1月号)
 - 「日本とメキシコ 2～幕府とヌエバ・エスパルニャ副王府～」、同(1994年2月号)
 - 「日本とメキシコ 3～日墨修好通商条約～」、同(1994年3月号)
 - 「メキシコ南部チアパス州に息づく日本文化—旧榎本殖民地を訪ねて—」、日本放送協会『NHK ラジオ・スペイン語講座』(1997年7月号)
 - 「中南米移住—太平洋を渡った日本人たち—」、同(1997年8月号)
 - 「中南米の日系社会と日本人との関係—21世紀に向けて—」、同(1997年9月号)
 - ・柳沼孝一郎他訳 『日墨修好通商条約百周年記念 アカプルコの交易船ガレオン展 EL GALEÓN DE ACAPULCO』 駐日メキシコ合衆国大使館、1988年
 - ・柳沼孝一郎 「太平洋への道—日西交渉史のあけぼの—」(『インディアスの迷宮 1492-1992』 勁草書房、1992年)
 - ・柳沼孝一郎 「17世紀前後における日本とヌエバ・エスパルニャ～交渉関係の史的変遷とその構造についての—考察～」(日本ラテンアメリカ学会『ラテンアメリカ研究年報』第8号、1988年)
 - 「ロドリゴ・デ・ビベロの対幕府『協定案』—日西交渉史研究の視点から—」(『神田外語大学紀要』第5号、1993年)
 - 「『日墨修好通商条約』の締結過程と史的意義～近代日墨関係史研究の視点から～」(『神田外語大学紀要』第6号、1994年)
 - 「初期の日本人メキシコ移民のメキシコ社会順応に関する—考察—メキシコ・チアパス州における『日墨協働会社』を中心に—」(神田外語大学異文化コミュニケーション研究所『異文化コミュニケーション』第9号、1996年)
 - 「『榎本メキシコ殖民』の構想とディアス政権～近代メキシコの殖産興業政策と初期の日本人メキシコ移民～」(『神田外語大学紀要』第11号、1999年)
 - 「ディアス政権の産業振興・殖民政策と日本人移民—メキシコのコーヒー産業と日本人殖民構想の史的背景—」(ラテン・アメリカ政経学会『ラテン・アメリカ論集』第33号、1999年)
 - 「近代メキシコの産業開発における日本人移民～『移民会社』の変遷と日本人メキシコ『契約移民』を中心に～」(『神田外語大学紀要』第12号、2000年)
 - 「日本メキシコ経済連携協定(EPA)の史的背景」(『神田外語大学紀要』第18号、2006年)
 - 「日本とメキシコ～日墨関係400年の系譜～」(神田外語大学・国際社会研究所紀要『国際研究』創刊号、2010年)
 - ・国本伊代・柳沼孝一郎他 『現代メキシコを知るための60章』(明石書店、近刊)

ドン・ロドリゴがスペイン国王に送った岩和田の報告（日本見聞記）

訳・注 大垣貴志郎（京都外国語大学教授）

日墨友好400年のきっかけとなった史書は少ない。日墨交流発祥の地 御宿について当時の様子を知る資料も殆どなく今日に至っている。

今回、ドン・ロドリゴ本人がスペイン国王に報告するために纏めた「日本見聞記」¹（大英博物館蔵）を大垣先生が翻訳された手稿原典の中から、スペイン国王陛下への献辞、読者への序文、漂流（漂着地岩和田）について先生の貴重な資料を転載させていただくこととなった。尚、手稿原典のうち主要部分の第1章～43章（①～④③）までの原典を転写し、そのうち、①～⑤は本項目に関する原典である。

1. スペイン国王陛下への献辞 ①

私は、これまで幾多の苦難を経ながらも陛下のご意向にそってお仕えてまいりました。それが私の任務であり、この報告も陛下のお手許にあってしかるべきものと考え、ここに本書を献上³いたします。そして、私たちのような記録報告書は、陛下の庇護がなければ、世間の不当な批判に耐えることはできないということをご理解くださるようお願い申し上げます。世界の三大陸については、いずれも私が訪ね歩いたところで、私の部下も隈なく各地の事情を把握しております。また単に記録を報告するだけでなく、時には兵士としても戦い、祖国に富をもたらすために陛下にお仕えしようと努めてまいりました。私の自分に課された役目は果たしたと思いますし、その結果に満足しています。もはや私には死しか残されておらず、生きる気力も失ってしまった今では、これが陛下への最後のご奉公になりましょう。私の最後の望みは、ここに陛下に真実の報告をお伝えすることです。陛下におかれましては、慈愛をもってここに記録されている内容をご高覧され、有効に役立ていただければ幸いです。またこの報告は陛下の領土に咲いた花のように、その美しさを認められ、やがては枯れ、忘れられていく運命にあるのかもしれませんが。世界中を旅した私は、平和時に老兵が戦争中の手柄を語るように陛下にいろいろお話しする所存です。私が今から申し上げることが不見識だと判断されますれば、これ以上続けるのは控えます。神の御旨が陛下をキリスト教世界にとってなくてはならないお方とされますことを切に祈っております。

陛下の下僕、バジェ伯爵

¹ 「日本見聞記」の手稿原典は、大英博物館に所蔵されている。全46章に分類されているが、主要部分の第1章から43章までが翻訳されている。

² 私—ロドリゴ・デ・ビベロ・イ・アベルサ（1564—1636）を指す。

³ 本書を献上いたします。—「日本見聞記」ロドリゴ・デ・ビベロの口述に基づいて記録したのは彼の書記官であるマヌエル・デ・モラで、本章の巻頭には次のような記述がある。「ロドリゴ・デ・ビベロが国王陛下に献呈する。スペイン君主の良き政治のための提示および提案を含めた日本国についての報告と情報。1609年。本報告書の清書はマヌエル・デ・モラが担当する。」

2. 読者への序文 ② ③

多くの素晴らしい体験をしながら、長い年月をかけてスペイン、イタリア、大西洋、メキシコ、中国そして日本を私が巡ったことを思い起こしますと、この長旅の始まりはペルー産の胡椒の木を初めて見たパナマでした。私は今もそのパナマで、失意のうちに墓からペンを取り出す思いで、さしずめ高名な司祭が説教壇で福音書を読み、聞く者に福音を伝えるかのように波瀾万丈の過去をまとめています。ここに記す全ての事柄は私の体験です。読者の皆さんにはそれぞれ興味のそそられる部分を読んでいただければ結構です。人の好みは千差万別ですから、自分に興味がないからといって、その内容を軽視する態度はあまり好ましくないように思われます。ある人には興味を与えないとしても、他の人には面白いと映ることもあるからです。たとえ記述に間違いがあったとしても、それは故意に生じたものではないことを予めお断りしておきます。

ロドリゴ・デ・ビベロ・イ・ベラスコはフィリピン総督および任務を終了し③、帰国の途に着く途中、日本へ上陸した際に見聞した非常に珍しいものについては、幾つもの紙片に書き留めていました。好奇心のある人なら誰でもこれを読みたく興味をそそられるでしょう。但し、実際の出来事とは思えない部分は割愛していただいても構いません。また事実関係を確かめたければ、これらを実証する文献やその著者にあたって確認願えれば幸いです。それでは報告書に移ります。

3. 漂流 ④ ⑤

1608年9月30日⁴、栄えある聖へロニモの祝日、フィリピン総督府⁵で任務を終了した私を乗せフィリピンを出発したガレオン船サン・フランシスコ号⁶は航路を見失った。この地点で嵐や難破に遭うことは決して珍しいことではないが、その時の様子を書き留めておくことにする。出港して65日目に私たちは不運に見舞われた。このひどい災難が北の海⁷でおこったのか、南の海⁸で起こったのか定かではないが、一難去ってまた一難、船はそれまで日本の先端と思われていた北緯33.5度の岩礁にぶつかり大破してしまった。ひどい痛手を受け波にもまれながら、日本領土の正確な先端である北緯35.5度まで辿り着いた。しかし、これが神の意思だったのか、このガレオン船は、積んでいた200万ドゥカド⁹の財産もろとも難破することになった。船は跡形もなく破壊されてしまったため、夜10時に岩礁に乗り上げてから翌日の日の出の半時間後まで、一命を取り留めた者は索具やロープにつかまって④夜を過ごした。一番勇敢な船員でも、溺れあるいは波に打たれた遺体が50ほど

⁴ 1608年9月30—1609年の誤りである。

⁵ フィリピン総督府—第7代総督 ペドロ・デ・アクーニャの死後の後継者として、ファン・デ・シルバが任命されたが、新総督がスペイン本国から任地に到着する間、臨時総督として任務に赴いたのがロドリゴ・デ・ビベロである。

⁶ サン・フランシスコ号—1609年4月、フェリペ3世はファン・デ・シルバをフィリピンの第8代総督、軍隊総指揮官及び高等法院長に任命した。そこで前臨時総督であったロドリゴ・デ・ビベロは、在職中のことを王に報告するために、サン・フランシスコ号に乗ってヌエバ・エスパーニャに向かった。同船の規模は1000トンであった。

⁷ 北の海—大西洋のこと。

⁸ 南の海—太平洋のこと。

⁹ ドゥカド—(貨幣単位)昔ヨーロッパ各国で用いられた金貨。スペインでは16世紀まで使われていた。

流れていくのを見て、自分もこれで最後かと神に祈りはじめる始末だった。神の深い慈悲に救われた私たちは、船尾の木材や板切れにつかまったりして陸に向かった。強靱で、運良く陸に着いた者の中で、服の切れ端でもわずかに身に付けていた者は幸いだったと言わざるを得なかった。この緯度からしてここが日本だとは考えられないと操舵員が言うので、その島が無人島なのか、そこが一体どこなのかも知らずに陸へ上がると、何が見えるか確かめるために、私は船員二人を高台に登らせた。しばらくすると二人が戻り、喜んでください、田畑がみえます、と報告してきた。しかし、これで私たちの食糧が保証されたわけでは決してなかった。私たちには命を守るための武器もなく、兵力もわずかしかなかったからである。もしこの島の住民が親切に私たちを受け入れていなければ、一体どうなっていたことか。それから15分ほどすると日本人がやってきた。再度、私たちはこの上ない嬉しさと喜びに浸った。特に私にとってこの感激はひとしおであった。私が着任する前に、フィリピンを統治していたアウデンシア¹⁰が、200人の日本人を捕虜にしたことがあった¹¹。着任後の調査で日本人捕虜の弁明が正当だったことから、私は彼らを牢獄から釈放するだけでなく、祖国まで無事に帰国できるように船と旅費を提供し、その後日本の大御所¹²から深い感謝を伝えられたことがあった。私はこのことをしっかりと心に刻み、この人の謝意に常に大きな期待を抱いていた。そうして、ようやくその期待に応えてもらう機会が到来した。話は戻るが、5、6人の日本人が私たちの方へ寄って来て、その言葉や様子から私たちの姿を哀れんでいる様子がわかった。出航以来私に同行していたキリスト教信者の日本人を通じ、私たちがどこにいるのかを尋ねさせた。彼らは少し考えてから⑤、ここは日本で、彼らはここから1.5レグア¹³離れたユバンダ¹⁴という名の村の者だと答えた。その村へ行く道中、突き刺すような冷たい風が吹いていた。日本列島の冬の風は厳しく、私たちが上陸した時はもう初冬であった。私たちはろくに服も身に付けていないような恰好で、この日本列島の果てかと思われるような村に着いた。ここはこの国でも最も辺鄙で貧しい村ではないかと私は思った。領主である本多家の殿¹⁵は、300人足らずの家臣しか抱えていないため、その所得は限られていた。後に触れるが、大勢の家臣を抱え、広大な領地を所有する難攻不落の城主とは比べものにはならない。村に着くと、私に同行している日本語の通詞が、私がルソン島の総督であったことを伝え、私たちにふりかかった災難について説明した。彼らは私たちのことを気の毒に思ってくれ、女たちは泣き出すほどであった。日本人は非常に同情心が強いようだ。そして女たちは夫の服を私たちに貸してくれた。それは「キモノ」といって、綿でできたものだった。女たちは実に気前よく、私たちにその着物をあてがってくれた。また、彼らの食料である米、大根や茄子などの野菜のほか、村の浜では漁ができないにもかかわらず、魚までしばしばふるまってくれた。

¹⁰ アウデンシアーカステーリャおよび新大陸に設けられた聴訴院、司法院、裁判所。新大陸では司法機関のほか行政機能も兼ねた。

¹¹ 日本人を捕虜にしたことがあった—1607年のマニラ在住の日本人暴動を指す。

¹² 大御所—手稿原典では、Emperor, Shogun, Mikado等の名称を、徳川家康を指すものの同義語として使っている。訳文の脈絡から判断して、訳語は徳川家康または大御所とした。

¹³ レグア—(長さの単位) スペイン、アルゼンチン、メキシコ、チリ、パラグアイで用いられていた。スペインでは1レグアは5572mに相当する。

¹⁴ ユバンダ—上総国夷隅郡岩和田と考えられる。現在の千葉県御宿町付近である。

¹⁵ 本多家の殿—本多出雲守忠朝のこと。

—参考文献—

日本見聞記 ロドリゴ・デ・ビベロ 1609年（たばこと塩の博物館発行）

甦るドン・ロドリゴの生誕地と霊廟

土屋武彌（日墨 400 周年企画実行委員会委員）

河東田清俊（テカマチャルコ工業大学元教授）

プエブラ州テカマチャルコ市は、日本とメキシコ友好の絆をつくったドン・ロドリゴ・デ・ビベロ・イ・アベルサの生誕地である。そして同市のサンフランシスコ修道院は彼の死後、遺書により祀られた霊廟である。

さて、ドン・ロドリゴの名は知られているが、彼の生誕地がどこで、どのような所か。そして死後にどこに祀られ、どのような状況にあるかは長い歴史の中で語られることはなかった。

1609年9月30日、千葉県上総国岩和田沖で台風に遭遇、漂着したドン・ロドリゴ一行317名（他56名は死亡または行方不明）を救出した御宿町は、日墨400周年を記念して「メキシコ友好親善使節団」を派遣し、最初にドン・ロドリゴの生誕地テカマチャルコを訪問した。日墨友好発祥の地御宿町からの初来訪に同市始まって以来と言われるほどの大歓迎と式典、サンフランシスコ修道院での献花式が挙行され、式典ではラミレス市長が御宿町と友好姉妹都市の希望が出され、新しい友好への第一歩がスタートした。

1. 生誕地テカマチャルコ

昔、スペインとメキシコを行き来した船は、メキシコ湾のベラクルス市の北部にあるサンファンデウレア港に着き、メキシコの産物をスペインに送り、スペインのものをメキシコに陸揚された。現在も毎日多くの人や大きな荷物を積んだトレーラーが行き来している。

ベラクルスとメキシコ市の間にあるのが、街中が博物館のような美しいプエブラ市で、1530年頃市となっていたと言われる。スペイン人がメキシコ上陸以前からの町としては、プエブラ市から北に約40km離れたトラスカラ、西に約110km離れたピラミッドで有名な Cholula、そして約75km東にドン・ロドリゴの生誕地テカマチャルコ市がある。

テカマチャルコ市は海拔2,055m、北緯19度、西経97度に位置する。経度はインドのボンベイ、緯度は米国テキサス州のサン・アントニオ市にあたる。高所にあるテカマチャルコは、昼間は摂氏30度を越えるも夜は上着が欲しくなるほど涼しく、夏でも熱帯夜がない快適な所である。メキシコの標準時間はシカゴと同じ時間になる。テカマチャルコとシカゴとは経度で約15度位の差があり、通常時間であれば1時間の時差は、夏時間になると更に時差が1時間増え2時間になるので、体調が崩れがちになる。

プエブラ市から国道150号線を東に約70km走ると灰色がかった薄緑色の二つの山 ナシミアントとモヌメントが見える。山には水が少なく、ユーカリの木やサボテンが見えるだけで、テカマチャルコ市の中央から見ると緑色の山には見えないのである。東に約70km走った所からナシミアントの中腹に、テカマチャルコのサンフランシスコ修道院の鐘楼と聖堂が見える。テカマチャルコ市の旧市街はナシミアントの南側にある。

テカマチャルコは、スペイン人がメキシコに上陸する前から既に町になっていたが、大きな川は

なく、生活に必要な水は常に節約、また12月から4月頃までは雨は殆ど降らない。このような所に町が出来ていたのだ。それでもメキシコ国内の他の土地に比べれば水があったのかも知れない。

テカマチャルコでは石灰が採れ、この石灰はメキシコでは建築、土壌改良、虫除け等いろいろな産業で使われているので、スペイン人がメキシコに上陸する前から安定した仕事があり、各地から人々が集まって来て町になったのである。石灰はタコスの皮、トルティジャをつくる時に使われ、現在でも美味しいトルティジャをつくる店では石灰を使っているが、日本の観光客はそのような場所には行かないので日本人からは信用されていない。

井戸水は濃度の濃いカルシウムが含まれた硬水で、濾過処理をしなければ飲めない。台所のボウルなどに水を張っておくと、5~6時間後に含まれていたカルシウム化合物が分離し、ボウルの底に白色の沈殿物が残るのを見ることができる。従ってミネラルウォーターや清涼飲料水、あるいは殺菌処理をしたものを飲む。水は生活や農業、他の何をするにしても大切なものだが、残念ながらテカマチャルコはあまり水には恵まれていない。

水なしでつくれるものはサボテンや竜舌蘭である。手入れが要らないのでテカマチャルコのどこにでもサボテンは生えている。サボテンは茹でて皮トルティジャで包みタコスとして食べるが、焼いて食べる人、揚げて食べる人もいる。赤や黄色のサボテンの実はたくさんの種が詰まっており、サボテンの形からは想像できない美味しいものである。このようにサボテンは惣菜として、あるいは果物として食べることができる。

竜舌蘭はバラより鋭い棘をもち、葉の長さは1.5~2mもある。葉の繊維を糸にして織物や衣服をつくり、鋭い葉の先端を上手に外して糸付きの針として縫い物に使っていた。竜舌蘭の葉を取った幹は発酵させて白濁した醸造酒プルケをつくり飲んでいる。竜舌蘭の中から約1cmの桃色か橙色のテコレスという虫を採り、揚げて塩をふり酒の良いツマミとなるが、形はカップエビセンに似ている。広い場所を必要とする竜舌蘭は、住宅地区では邪魔になり、開発による町の発展とともに数が少なくなった。

さて、忘れてならないのはトウモロコシである。主食タコスの包み皮トルティジャをつくる。日本で売っているものとは色も形も違い、不揃いで甘くないが、バイオ処理をしていない自然なものである感じがする。トウモロコシはある程度水分がある所で生育するため、テカマチャルコのどこでも耕作できたのではない。現在では、西になるトラネパネトラ辺りからテカマチャルコに水が流れている農業用水で、いろいろな農産物が広い範囲で耕作できるようになった。驚くことに、今日テカマチャルコの隣町のウィトゥスコトゥラの市場では、日本の大根やニラや春菊が売られているが、東京農業大学の卒業生が根付かせたものと思われる。

更にメキシコ人にとって重要な食べ物として香辛料、唐辛子、紫蘇のような種々のものがある。テカマチャルコでは昔から栽培され、現在でもアステカの時代と同じように石を使って播り潰している。トウモロコシや香辛料の食文化は、スペイン人がメキシコに上陸する前からあったことが分かる。

テカマチャルコのピラミッドから出土した釉薬を付けて焼いた陶器の、アステカの神の姿や素焼きの食器を見るに、テカマチャルコにあった文化を考えることができる。

しかしながら古い歴史と文化と産業がある重要な土地であったテカマチャルコはメキシコ国内でも知られていない。メキシコ市では高級住宅街だと思われ、プエブラ州テカマチャルコ市を考える

人はいなかった。

テカマチャルコとは“顎の骨”を意味するという。モヌメントの山の頂上から、ナシミアントの山の端から端までを見渡すと、顎の骨を歯が生えている方を上にした形に見えるようだ。顎の骨は特別な意味があるのであろうか。アステカの書物の中には、戦いの勝利者が倒した敵の顎の骨を並べた絵があり、勇者であることを誇ったとのこと。すると、テカマチャルコは巨大な敵を倒した類い稀な勇者の町ということであらうか。そしてテカマチャルコの人々の間では、ドン・ロドリゴこそが初代駐日大使であったといわれ、1564年にサンフランシスコ修道院と市庁舎の間の市の中心部近くの邸宅で誕生したと言われる。

テカマチャルコ市には、現在大きな企業が3社ある。一つは、国道150号線がプエブラに向かう一番目の橋を渡った所にある製粉工場、二つ目は、市内の国道150号線に沿った所にある鶏肉会社。三つ目は、テカマチャルコの山 モヌメントの北側にセメント工場がある。

2. 霊廟サンフランシスコ修道院

1541年、テカマチャルコのナシミアントの山の中腹にサンフランシスコ修道院が建てられた。1521年、スペインのエルナン・コルテスがアステカ王国のテノチティランを征服したわずか20年後のことであった。この修道院はキリスト教に改宗を強いられた先住民の反乱に備え、籠城抗戦を想定した城砦教会造りであった。そしてこの修道院はドン・ロドリゴが72歳にしてオリサバで死後、残された遺書により祀られた霊廟である。

修道院の左側には、驚と何本もの槍を彫り込んだ石があり、そこに建築年が彫られている。入り口の大きな扉は厚い材木で作られている。この材木を作れるほどの木は現在のテカマチャルコの山には見当たらない。テカマチャルコからプエブラに向かう国道150号線のアモソクの町に入る前の道路の両側に、幹の太さ1m、高さ30mの大木の並木が15km続いていたといい、差し詰めこの大木なら修道院の扉を作ることは可能であったらうと思われる。昔の旅人は、この大きな木陰で人馬ともに一休みしたことであらう。残念ながら5年程前に道路拡張のため伐採されてしまった。

修道院の扉から中に入ると、左手には鐘楼に登る螺旋階段があるが鐘楼に登ることはできない。天井を見上げるとたくさんの絵が描かれているが撮影禁止である。アダムとイブが楽園から追放された時の絵、洪水に浮かぶノア方舟、人類が初めて殺人を犯すカインとアベルの絵など、聖書に書かれた場面の絵を描いたものである。なぜ、描いたのだろうか。当時、スペイン語一ナウアトル語の辞書がない時代に、スペインから派遣された神父や修道士がメキシコ人との間に、キリスト教を説明するためのものとして、聖書を理解させるために描いたのである。

目を天井から下に向けると、大きな石造りの聖水盤がある。床を見ると本物の岩から切り出した硬い石が敷かれている。

左手の側には大きな十字架が架けられている。この十字架にはキリスト像がなく、釘や髑髏や梯子や槍などが付いている。キリストが十字架に磔にされたとき、腕や足に打ち込まれた釘、処刑された場所ゴルゴタとは髑髏を意味し、脇から槍を突き刺されたことを説明するのに使われたのであろう。

壁には所々に縄や竜舌蘭の絵が描かれているが、あちらこちらに凹凸があり、その部分は塗りつぶされている。壁の絵を剥がし売り飛ばした不届き者がいたと思われる。

更に天井の高さには驚かされる。スペイン国内のように、メキシコには鉄工業がなかった時代でも、メキシコにはピラミッドを造った土木技術があった。イダルゴ州のトゥーラには屋根がある巨大な石造りのアトランティスが立てられているピラミッドがあることから、直線220km先のテカマチャルコにその建築技術が使われていたのであろうか。

目を天井から右側の壁に移すと説教壇がある。説教壇は神父が説教をした所である。現在、神父は中央祭壇でミサを司式するので説教壇は使われていない。

テカマチャルコのサンフランシスコ修道院は、とても広く、聖堂で行われるミサはマイクロフォンを式服に付けて行うので、音響が良く福音を聴くことができる。

正面祭壇の下の右手に祭器室の出入り口がある。神父はここから出入りするが、入り口は彫刻が少し施してあるだけである。一般にはフランシスコ会の教会はきらびやかな飾りは少ないが、テカマチャルコのサンフランシスコ修道院は特に質素な感じがする。

祭器室の出入り口の反対側の壁には、大きな黒ずんだ絵の額が掲げられているが、絵の中にたくさん的人物が描かれているものの、誰かは不明である。ことによると、この中にドン・ロドリゴが描かれているのではないかと想像してしまう。

この修道院はまさしく廃墟であった。鐘楼が見える正面の壁のあちらこちらに砲弾の跡や銃弾の跡傷が残っていた。100年前のメキシコ革命により修道院が襲われたのであった。貴金属で装飾された聖像、キリストの受難の絵、祭具、祭服、聖書、食器、農機具、文書、手紙、筆記具など全てがなくなっていた。

現在、すぐ横の小さな博物館には修道院のものとされる展示物は見出せない。メキシコではスペイン上陸以前からアマテ紙が作られていた。木を叩いて作ったものである。このアマテ紙には、スペイン上陸以前の情報がたくさん書き残されていたようで何とも残念なことである。

さて、このサンフランシスコ修道院にはドン・ロドリゴの墓はないといわれていた。修道院そのものがビベロ家の霊廟で“Cripta”と呼ばれる納骨堂である。礼拝堂の地下にはブスマン、ブエラスコ、アベルーサ 三大に亘るビベロ家の、そして後年代々の縁者の霊が祀られている。驚くべきことに、ロドリゴの死後375年にして、祭壇の下の穴から3人の骨が発見された。メキシコ国立人類学博物館の調査報告が待たれるところである。

3. テカマチャルコ、プエブラの歴史概観

テカマチャルコの歴史に関する資料は極めて少ないが、インターネットの資料によると以下のようになる。

1230～40年（日本の鎌倉時代）

テカマチャルコの北面約20kmにあるアカシゴに、メキシコ北部から来た人たちがいたと書かれている。

1441年 ポポロカス族により、モヌメント地区でテカマチャルコの町がつくられた。

1483年 トゥラコテペクに居住区ができていた。（次なる情報では）

1520年 旗頭ウァトゥツィンは、トゥレウエソジョトゥツィンで死に、

1521年 知者クェトゥスパトゥツィンは、白い鷲と言われた。

さて、ウァトゥツィンとは何者で、トゥレウエソジョトゥツィンとはどこか、なぜ死んだのか、

そしてクェトウスパトゥツィンとは何をした人物か。時代的にスペイン人との戦いなのか不明である。

16世紀 ヘロモニ・デ・メンドサとフランシスコ・デ・トラルは、テカマチャルコで教宣活動のための寄付を募り、教会と修道院の建設を行った。これがサンフランシスコ修道院に関する文献である。

修道士のディエゴ・デ・エストレメラはテカマチャルコの教会をアスンシオン教会と命名した。現在のテカマチャルコの教会名は、デ・ラ・アスンシオン・デ・マリア教会であるので、その後誰かが教会名を変えたのであろう。因みに、アスンシオンとは聖母昇天を意味し、パラグアイの首都名と同じである。

1821年9月 スペインから独立する。

1829年 ゲレロが大統領に就任した。

1861年8月13日 地方議会の行政命令により、独立遂行者の名誉を称え、ビジャ・デ・テカマチャルコ・ゲレロと命名された。

1862年5月5日 フランス ロレンス伯爵命令により、オーストリア大公のマクシミリアンがプエブラ市セントロの北東部の要塞 ロント・イ・グアダルペに攻撃をかけた。イグナシオ・サラゴサ将軍がこれを迎え撃ち勝利した。

1862年9月8日 地方議会は、戦死したイグナシオ・サラゴサ将軍を、プエブラの英雄としてその功績を讃えた。これによりプエブラ市をプエブラ・デ・サラゴサということもある。

テカマチャルコの歴史にはプエブラの戦勝のことが記されていないのは、フランス軍がベラクルスに向かって敗走した時、テカマチャルコを通り抜けたためであった。

1869年 初の現地人大統領 ベニト・ファレスが、プエブラ鉄道開通式に出席。

1877年9月6日 州議会の命令により、テカマチャルコ・ゲレロ市と改め、市の等級に上げられた。現在の名称はこの時代に決められたものである。

1909年7月19日 ポルフィリオ・ディアス大統領の再選反対集会が開かれ、アキレス・セルダンが集会議長となり、これがメキシコ革命が起こったと言われる。

1910年11月18日 抵抗の英雄 マキシモ・イ・アキレス・ゼルダン兄弟がプエブラ市で殺された。

メキシコ革命は、日本の百科辞典によると、1910年11月18日 フランシスコ・イ・マデロがポルフィリオ・ディアスに対して武装蜂起をして起こったとされるが、テカマチャルコ・ゲレロ市の資料によるとテカマチャルコ出身のイヒニオア・ギラル将軍とミゲル・マルチネスとイスマエル・カストロによりメキシコ市民革命が起きたと記されている。

ポルフィリオ・ディアス大統領打倒には、フランシスコ・マデロの他に、農民をバックにしたエミリアノ・サパタとパンチョ・ビザ、そして中産階級から支持されたベヌスティアーノ・カランサの4人が立ち上がった。長期政権を続け、外国資本を受け入れ、1910年には鉄道、石油、鉱山資本の97%が外国資本となり、これらの産業ばかりか、殆どのメキシコ人が働く農業には顧みず、農業労働者の生活は過酷であり、殆どのメキシコ国民が大統領打倒に賛成したと伝えられる。

1911年5月 フランシスコ・マデロはポルフィリオ・ディアス大統領を追放するも民主化には関

心を示さず、4人の考えが一致したのは大統領打倒だけで、それ以外のことは纏まらなかった。その後、フランシスコ・イ・マデロは元大統領派に暗殺され、他の3人の間には戦いが続いた。この革命の間にアメリカ陸軍は国境侵犯をしたり、アメリカ海軍がベラクルスを占領したりしたが、第一次世界大戦時のヨーロッパはメキシコに手が回らなくなり、ヨーロッパからの干渉はなかった。

1914年 プエブラ市はサパタ軍の手に落ちた。

1917年 ベアスティアノ・カランサがここを制圧した。

1917年2月 メキシコ憲法が発布され、地下資源、水、土地を国有化した。これによって莫大な資本投資をしていたアメリカは大きな打撃を被った。

1937年 鉄道を国有化した。

1938年 石油を国有化した。

国は教会財産を没収し、教会や修道院をホテルに売却した。現在も修道院をホテルにした建物が見られる。カトリック教会は政府のこの憲法に反対しミサを放棄した。

政治と宗教が分離されたため、テカマチャルコのサンフランシスコ修道院の破壊は、革命グループにより正当化された。

テカマチャルコの歴代市長は次の通りである。

1939～41年 ダリオ・ロドリゲス・リオン

1960～63年 エルネスト・ゴメス・カマチョ

1963～66年 グメルシンド・ロサレス・パエス

1966～69年 イサク・サントス・バスケス

1972～75年 ホルヘ・エスピノサ・モロ

(テカマチャルコの水問題を軽減しようとモヌメントの北側から水を引いたが財政難で完成せず。)

1975～78年 ホルヘ・アントニオ・ガリシア

1978～81年 モイセス・ミエル・モクテスマ

1981～84年 イグナシオ・ゴメス・ブレトン

1984～87年 ガビノ・グランダ・ペレグリア

1987～90年 ミゲル・アンヘル・ペーニャ・トーレス

(大変な親日家で、孫娘がヨーロッパに留学希望していたのを、日本語を学ばせるため日本に留学させた。)

1990～93年 アウレリオ・ロペス・リオス

(メキシコやアメリカの野球界で活躍した大リーガー。メキシコからアメリカに渡りカンザスシティ、セントルイス、デトロイト、ヒューストンで投手として、メキシコでは147勝130敗、アメリカでは62勝36敗の成績を残す)

1993～96年 ドクトル・ベニト・アルベルト・コルテス・ゴメス

1996～99年 リセンシアド・エクトル・マウリシオ・イダルゴ・ゴンサレス

1999～2001年 ガビノ・グランダ・ペレグリーナ

2002～05年 ラウル・エラスモ・アルバレス・マルティン
2005～08年 ヘススノ・タリオ・ディアス
2008～11年 イネス・サトウミノ・ロペス・ポンセ
2011～ ラミレス

—参考資料—

Una Historia de la Ciudad de Tecamachalco — Kiyotoshi Katoda
日墨交流史（日墨協会／日墨交流史編集委員会 — PMC 出版発行, 1990）

スペイン国王に捧げたドン・ロドリゴの一生

土屋武彌（日墨 400 周年企画実行委員会委員）

1564年 ヌエバ・エスパーニャ（現在のメキシコ合衆国、当時はスペインの副王領）に生まれ、本名をロドリゴ・デ・ビベロ・イ・アベルサ¹⁶と言った。父はロドリゴ・デ・ビベロ・イ・ベラスコ、母はメルチョーラ・デ・アベルサの子として生まれた。父はサリナスとカリオン領主で第二代副王のルイス・デ・ベラスコの甥。母はテカマチャルコのエンコミエンダ¹⁷の管理権を前夫から相続していた。

ロドリゴ自身は、レオノール・デ・メンドサ・イ・テ・イルシオと結婚した。

彼女の父はカルロス・デ・ルナ・イ・アンジャンノといい、ボロビア軍総監となった人物。母はレオノール・デ・イルシオ・メンドサといい、コンキスタドール¹⁸のマルティン・デ・イルシオと第一代副王アントニオ・デ・メンドサの妹のマリア・デ・メンドサの娘であった。

彼女の父方は中小貴族に属するイダルゴ¹⁹の出身で、母方は名門メンドサ家の流れをくむ家柄であった。

1576年 12歳にしてスペインにわたり、フェリペ2世の4人目の妻のアナ・デ・オーストリアの侍臣（=小姓）となった。

_____年 サンタ・クルス公爵指揮下のガレー船団²⁰に加わる。

_____年 アルバ公爵の艦隊に入隊。

¹⁶ ドン・ロドリゴ・デ・ビベロ・イ・アベルサ

ドン — クリスチャンネームにつける敬称で、日本語では～さまに相当。昔は身分のある人につけた。

ロドリゴ — 本人の名前で洗練名であろう。家名ではない。

デ — ～の～で と訳す。

ビベロ — 父親の家名

イ — そして、～ と訳す。

アベルサ — 母親の家名

即ち、ビベロ家とアベルサ家のロドリゴ様 となる。

¹⁷ エンコミエンダ = スペイン国王が植民地に対して、先住民を保護しキリスト教に改宗させることを義務づける代わりに、インディオスの徴税権と労役権を与えた制度で、エンコミエンダを受けた個人をエンコメンデロと称した。

¹⁸ コンキスタドール = 16世紀の初めに中南米に侵入し、征服活動を行ったスペイン人で、征服者といった。

¹⁹ イダルゴ = 郷土といい、爵位のない最下級の貴族。

²⁰ ガレー船 = 古代から近代まで地中海で用いられた多数の櫂を奴隷が漕ぐ大型船。

1595年 モンテレイ伯爵により、サン・ファン・デ・ウルアの防衛を委託された。

1597年 銀鉱山で栄える銀の町、タスコの大判事に任命された。

1599年 スエバ・ビスカヤ地方の総監および軍団司令官に任命された。

1606年 スペインの支配に反乱を起こした60以上のチチメカ族²¹集落を平定。

1608年 フィリピン第8代新総督ファン・デ・シルバがマニラに到着するまでの臨時総督および軍司令官として派遣された。赴任直後に、アウデンシア²²により拘束されていた日本人の暴徒200人の再調査を命じた結果、日本人の正当性を認め釈放の上、日本に帰国させた。帰国のための船と旅費を提供した。

1609年 (9月30日) マニラの任務を終え、スエバエスパーニャに帰国途中御宿沖で遭難、岩和田村の田尻浜に漂着、村民総出により乗員373人の内317人が奇跡の救出をされる。ガレオン船²³のサン・フランシスコ号で航行中のことであった。

1610年 (8月1日) 308日間の日本滞在で、二代将軍の徳川秀忠や大御所の徳川家康に謁見し、各地を見聞して浦賀からサン・ブエナベントウラ号で22人の日本人とともに出帆した。

〃 (10月27日) パハ・カリフォルニアのマタンチェルに到着。その数日後に無事アカブルコに帰港した。

1612年 ロドリゴが所有しているテカマチャルコの永久管理権、または息子から数えて四代までそれを授与すること、ロドリゴ自身のためにサンティアゴの呼称を、フィリピン統治に赴く際に財務部から借りた4000ドゥカードを与えるようインディアスの顧問会議に提出。

(5月8日) 顧問会議は、管理権の延長を二代までとし、その息子のために軍職を与えるとの見解をもらった。

1616年 (2月18日) スペイン国王は、日本皇帝がロドリゴに立て替えた金子を返却させることを承認した。

²¹ チチメカ族 = 10世紀以降、メソアメリカの北方から南下してきた放浪民族を総称し、アステカ族もチチメカ族の一部族。

²² アウデンシア = 新大陸に設けられた聴訴院、司法院、裁判所のこと。

²³ ガレオン船 = 16世紀前半から19世紀まで、スペインなどで外国貿易に用いられた風による横流れが少なく速力もでた大型帆船のこと。

1620年 フェリペ3世により、ティエラ・フィルメ²⁴の総督および軍司令官、パナマのアウデンシア議長に任命され、6年間の任に就いた。

1627年 (2月14日) フェリペ4世により、サン・ミゲル・エン・ラ・ヌエバ・エスパーニャ子爵の称号を授かり、貴族に列せられた。

 (3月29日) この称号はパジェ伯爵と改められ、パジェ・デ・オリサバ伯爵の称号を授かった。

1636年 大西洋沿岸陸軍司令官および軍最高司令官代理 (オランダ、イギリスからの防衛) の地位を授かる。最後に、ヌエバ・エスパーニャの軍総司令官を務めた。

1636年 (12月) ベラクルス州オリサバにて死去 (72歳)。遺書により故郷テカマチャルコに埋葬することが書かれていたとのこと。

— 参考文献 —

日墨交流史 (日墨協会／日墨交流史編集委員会編—PMC 出版発行)

日本見聞記 (たばこと塩の博物館発行)

16～17世紀日本・スペイン交流史 (大修館書店発行)

条約から条約へ—1889～2008年— (駐日メキシコ大使館発行)

日本400周年の歴史と日系企業50年の歩み (Antes Gráficas Panorama, S. A. de C. V. 発行)

²⁴ ティエラ・フェルメ = 本来は大陸を表す言葉であるが、固有名詞としては、南北両アメリカ大陸をつなぐ地域一体を示す言葉として使われた。

サンフランシスコ号「Q&A」

大野幹雄（海事補佐人）（日墨 400 周年企画実行委員会委員）

台風遭遇とマストの切断

サンフランシスコ号に限らず帆船のマストは船底から固定され、数層の甲板を貫通しているためマスト自体が緩んだりがたついたりすると船体の構造上強度を保てなくなり、防水上も水密性が保持できなくなります。記録によれば帆船の命ともいえるマストを切り落とさなければならない事態が起きたようです。実際にはマストを航海中にのこぎりなどで切ることは不可能で「マストを切る」ということはマストのつなぎ目から切り離すという意味です。本船も 3 本のマストが設置されました。フォアマスト（前部マスト）とメインマスト（主マスト）はそれぞれ 3 本の 8 角形に面取りした丸太材を金具バンドでつないでいます。この金具を緩めて取り外せばマストを切り離すことができます。天候が良くなれば元に戻すのは当然のことです。予断ながらこの暴風の前兆を見極めるのが至難の業で、船長が頭を悩ませる要因になります。船長の判断は乗組員全員から注目され、その采配の良否が今後の船長の指揮命令に影響を与えます。

座礁時の天候

見聞録によれば 22 時ごろ座礁したようです。この季節の日没は 18 時ごろと思われます。当時の本船は操縦不能状態に近く船速は 1 ノット、多く見積もっても 2 ノット前後でしょう。かりに 2 ノットとしても $2 \times 1.85 : 3.5$ キロ 4 時間で 14 キロ進む勘定になります。

晴天ならば 14 キロ先の陸岸は視認できなければなりません。

座礁したということは陸地が視認されていないということです。

視認されれば船速を止め水深を計測して投錨できる深さであれば投錨して座礁を防ぎます。以上より当日は晴天ではなかったことになり、つまり曇天か雨天と予想されます。

座礁当日又はその前日に岩和田は台風に見舞われたのか

当日岩和田は直接暴風雨に見舞われたとは考えられません。台風に襲われていれば家屋や物置などの補修手入れが行われるでしょうし、またその修理期間も現在のように重機、工具類が十分ない時代なので、その分人力と時間が必要とされます。早朝、村人二人が海岸を散歩できるということは通常の平穏な日々だと考えてよいでしょう。さらに座礁時点で暴風など悪天下であれば、座礁した帆船はほんの数時間で破壊され沈没してしまいます。

さらに、見聞録によれば八丈島付近で岩礁に当たってから 2-3 日航海しているわけですからこの間に台風遭遇したとも考えられません。かりに、台風遭遇していればそれこそ命がけで防水、排水作業をするでしょうし、岩礁にあたった事実を記載するのは当然としても、その後の台風遭遇した事実、もしくは「神の思し召しで…」などという記事があつて当然です。それらの記述がないということは支障がありながらも航海を続けていたと考えてよいでしょう。これらから座礁時およびその後は暴風ではなかったと考えて差し支えなさそうです。

身に着けたものは服の切れ端だけ・・・

服を着たままで泳げません。理由は服と体の間に海水が入り込みこの海水が体にまとわり付くような格好になり極端に浮力を減少させるからです。よく水泳達者の人が溺れる事故がありますがこれは服を着たままで泳ごうとするからです。薄いシャツか下着になれば浮力はそれほど失いませんが、つなぎ服やジャンパー、袖口を絞った作業服のような服を着ていると、水が服の間から入り込み、その水が逃げ場がなく鉛のように体にまとわり付き、いくら手足を動かしても、浮力が無くなり、体が沈んでしまい、泳げる人でも溺れてしまいます。今回の事故でも洋服を着て海に飛び込んだ人は溺れたことでしょう。

村民はどのような理由でスペイン人を助けたのか

まず、日本人が乗船しており通訳ができたこと、次に宣教師が武器を持たずに村民と逢い、情報交換ができたことなどが考えられます。

特に通訳をした日本人の説明が的を射ていて村民を納得させることができたと思います。次に宣教師の役割です。

特に最初が肝心で最少人数だけが上陸して状況を訴えお互いに敵ではないということを強調したと考えられます。

神からの使者、もしくは神と人間の間を取り持つ聖職者としての証などを披露したことでしょう。岩和田の人にしてみればそのような行為を信じて、神からの使者と考え、小生の勝手な想像ですが「天狗の集団が海から上陸してきた。助けないと罰が当たる・・・」というような状況を引き起こし、大救出作戦が取られたと考えられそうです。当時スペイン人が宣教師を先駆出こして中南米を植民地にした経験が役立ったことでしょう。

海女が人肌で暖めて助けたということは本当なのか

意識不明もしくは体の冷たくなった朝者を急いでお湯で暖めたり、日本式の風呂に入れたりすることは現代の医学から考えると甦生しなくなる確率が高くなると指摘する専門家がいます。

400年前とはいえ、海で仕事をする海女は経験的にこのようなことは知っていたことでしょうから、素肌で暖めたということは十分考えられますし、甦生されたスペイン人もいたことでしょう。

岩和田村民をどのように管理したのか

宣教師の出番です。特にカトリック教徒は十字架かイエスキリストの像や絵など具体的に目に見えるものを拝んで祈りをささげ信仰しますので、言葉が通じない岩和田の村民にも分かりやすく意志の疎通はできたことでしょう。

恐縮ながら今回の事件は別として極端な例を次に書かせていただきます。

万が一、原住民とスペイン人の間でいさかいが起これば、その原住民の目前で家畜または身近な小動物を射殺すればどうでしょうか。ピストルを知らない原住民ならば恐れおののいて反抗しなくなるのは当然でしょう。

ちなみに、同じクリスチャンでもプロテスタントはキリスト像や絵など目に見えるものを前にしてお祈りをしませんので原住民に対して説得力に欠けたかもしれません。

村民が何かを盗んだか

歴史の資料などでは江戸からも人々が駆けつけ多くの品物が盗難にあったように記載されておりますが事実でしょうか。

スペイン人が家族から離れて命がけで仕事をしてきたのに盗まれるようなことをするのでしょうか。筆者なりに分析してみます。

まず、海岸には多くの品物が流れ着いたのは当然のことでしょう。

では具体的にどのようにして盗難を防いだのかを考えてみます。

まず、入り江又は海岸の出入り口を一箇所または 2 箇所に限定します。そのほかの場所からの出入りは禁じます。その出入り口には守衛（門番）を配置させます。

当然 300 人の中で健康な人、たとえば健康者が 2 割いれば 60 人で 2 人の徹夜の当直態勢を連日取ることができます。

(現在でも停泊中の船内では昼夜通して舷門に当直者が配置されています)。守衛は当然のようにこの出入り口を通る村民の手荷物を検査します。拒絶すれば犬のように射殺されるかもしれません。たとえ、海女や漁師がスペイン人の食事として魚介類を収穫したとしてもそれらの収穫物や道具などすべてを入念に検査されたことでしょうし、万が一不届き者がいて何かを隠し持てば、船長などに報告、村民の目前である種の見せしめとして処刑したことも考えられます。

何故ならば航海中の船内で同国人のスペイン人が食料、飲料水、武器などを盗み出せば船内秩序の確保として処刑をする時代ですので当然のことと考えられます。

ただ、37 日間の滞在後、スペイン人が去った後から漂着した品物、もしくは海底で発見した品物、もしくは以前から海底に存在していたのを認めていたが拾わずにいたものなどを拾得し個人の品物にしたことはあったでしょう。

また、大宮寺や大多喜城に奉納されたり、忠朝侯に献上されたとも考えられますがどちらも火災にあっていますので品物も記録も残っておりません。なお、見聞録には「積んでいた 200 万ドウカドの財宝もろとも難破することになった。船は跡形もなく破壊されてしまった…」という記述がありますので当初、乗組員が持ち出すことはできなかったのだろうと考えます。

37 日間滞在の理由

何故当地にいたのでしょうか。それは動かすことができなかった理由があったと考えるのはいかがでしょうか。

つまり骨折の治癒のためと考えることができます。

ロドリゴの日本見聞録と船長の報告書と意見の食い違いは

台風に 5 回遭遇、かろうじて助かったことを考えれば、300 人以上の乗組員は自分たちの船団司令長官や船長の采配と技量に疑問を抱いたことでしょう。

乗組員からの評判は悪く、将軍や日本人は元提督を敬えば、船長としては面目丸つぶれ、その結果、船長の報告書は日本人を悪くいわざるを得なかったと考えても止むを得ないでしょう。

また、船長の報告書とロドリゴの報告書で一致しない箇所をどのように判断をするのかは大きな課

題となります。

一般的には船内の状況、気象海象、座礁時の状況などについては船長の内容が正しいと判断してよいと考えられます。ロドリゴはあくまでも船客の一人で船のことや海のことについては全くの素人ですので止むを得ません。

スペイン人男性と村民女性とのロマンスは考えられるのか

300人以上のスペイン人が救助され、1ヶ月以上滞在していればロマンスの花ぐらいは咲いたと考えられます。この背景として考えられるのは、1600年にオランダの帆船「リーフデ」号が豊後で座礁、遭難したときのウィリアムアダムスやヤンヨーステンです。

彼らは徳川家康の外交顧問として日本に滞在し日本人女性と結婚をしています。

家康の強い希望があったのは当然ですが、救助された人にしてみれば、せっかく助けられた命をまた船に乗って遠い祖国まで数ヶ月かけて帰る気持ちにもならなかったのかもしれない。

また1842年、房総東方海上で漂流中の永寿丸、日本人13人がスペイン船に救助されて今のメキシコに上陸しましたが、このとき5人が日本に帰国、残りの8人は帰国せずにメキシコおよびほかの南米で永住しています。

当時の日本が鎖国の時代ということも考慮しても半数以上が帰国しなかったのです。

これらの点を考慮すれば300人以上もいたスペイン人の中には母国に帰らずに岩和田の女性と一緒に生活をした人がいても不思議ではありません。

大砲はどうしたのか

船内の上甲板またはその下のガンデッキに設置されていた大砲はどこに行ったのでしょうか。

本船の重心を下げて復元性を確保するためには大砲を海中投棄するかもしれないが、船内の一番下の船倉に移動しなければなりません。

どちらの作業にしても命がけで相当の危険を伴う作業になります。

当時の別な記録によれば「時化のときに大砲の固定が緩み、大砲自体が動き回ると船の動揺にあわせて猛牛が狭い船内を暴れ周ると同じで船側に突き当たり、これを何回も繰り返すと船側が破壊され沈没する」と記述されているほどです。

すべてを海中投棄したとは考えられません。後日に備えて最小限度の大砲は船底の倉庫に移動したと考えられます。

かりに移動したとすれば座礁時には船内に残存していたことになります。

座礁して本船が粉々に砕け沈没したとしても水深3-4メートルの海底に大砲はどっかりとおちつくでしょう。

海女や海人は簡単に発見できたと思いますし、スペイン人も座礁時に大砲がいくつ船内に残っているかぐらいは理解しているでしょう。

当時でも漁船や本船の材木を組み合わせれば簡単に海岸に運ぶことはできます。

大阪夏の陣の天守閣を攻撃した大砲に使われたのでしょうか。

それとも海底に沈んだまま、次項の大地震による地殻変動で埋もれてしまったのでしょうか。

田尻浜の形状と地震

現在の田尻浜は浜というよりは断崖絶壁に近く砂浜という部分は満潮になればほとんど海面で覆われてしまうほどです。ただ、海岸線の周囲は岩礁が多く、潮の満ち干で岩が海面から現れたり、隠れたりしていますし、現在では小さな漁船でも岩礁の内部に入ることはできにくいようです。

断崖は砂岩で非常にもろく、風浪による浸食は著しく、現在でも侵食は続いていますし、数十年前と比較すれば大きな変化が認められます。地形は風浪の浸食だけではなく、地震により大きく変化したと考えてよいでしょう。

たとえば 1703 年の元禄大地震などは房総沖合いで発生した大きな地震ですし、1707 年の宝永地震は日本史上最大の地震といわれて当地も大きな影響を受けています。

そのほかにも大きな地震に見舞われ、その都度地形が大きく変化したと考えられます。なお、日本見聞録には座礁地点が陸岸から相当遠い距離のように記述されております。

現在、私たちは単純に記述の誤りではないかと考える傾向がありそうです。

しかし、国王に報告する正式文書でしかも数字的な間違いをすることは一寸考えられません。

それよりは記述は正しいにも関わらず、座礁後に大きな地震に見舞われ地形が大きく変化してしまい現在の人には座礁地点が納得できないと考えたほうが無難なのではないでしょうか。

特に、千葉県南端の野島崎は陸続きではなかったのが地震でつながったようですからなおさらです。

岩瀬酒造の梁はサンフランシスコ号のものなのか

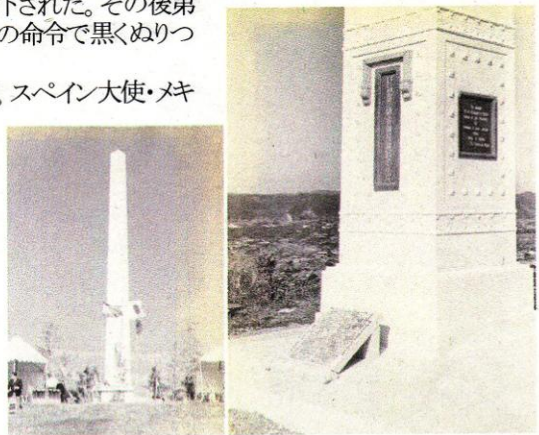
外観上だけを見れば間違いなく本物でしょう。

その理由は当時のスペイン、ポルトガルの帆船に使用するマストやヤードは丸太のまま使用せずに面取りして板を当てて、その上からロープを巻きつけて樹脂を塗っていました。その理由はマストを丸太単独で使用するよりは強度が増すということです。梁には市松模様のような跡が残っておりますし、面取りもされています。一方、イギリス、オランダの帆船は丸太材のまま使用していました。

御宿一日西墨400年の歩み

～ メキシコ・スペインとの友好親善 ～

- 1609.9.30 (慶長 14 年) サン・フランシスコ号岩和田田尻沖で暴風雨のため座礁
スペイン領フィリピン総督ドン・ロドリゴ一行373名、56名溺死、317名を岩和田村民が救助。大多喜城主・本田忠朝の明断により遭難者を37日間、岩和田大宮寺に滞在、村民の手厚い保護を受けた後、将軍秀忠、駿府の家康に謁見し、1610年家康が三浦按針に建造させた船によりメキシコ(アカプルコ湾)へ帰国。
- 1611 (慶長 15 年) 答礼使ビスカイノの来日、1613年支倉常長のメキシコ・スペイン・ローマ特派などの一連の史実は岩和田村民の心意気に端を発するもの。
- 1928.10.1 日西墨三国交通発祥記念之碑建立 (岩和田轟台) 高さ17メートル鉄筋コンクリート造り、大理石張り。徳川公爵の題字、スペイン国王の御親筆、メキシコ大統領のメッセージが青銅で鑄造。(設計者 美術学校教授金沢庸治 施工者 式田建設株式会社)
除幕式には駆逐艦2隻、空からメッセージが投下された。その後第二次世界大戦に目標となるというので軍部からの命令で黒くぬりつぶされる。
- 1958.11.27 終戦以来朽ち果てていた塔が白亜の塔に改修。スペイン大使・メキシコ副領事の参列により竣工式が行われる。
(工事費 810,495 円 諸経費 223,559 円)
(メキシコ記念公園の概要)
メキシコの人々と御宿町民の永久の友愛を象徴する公園であり、周囲の石垣は日本の城、メキシコのピラミッドのように1000年2000年の歴史にたえられるものと設計された。
- 1975.6.28 井桁三郎氏(南総郷土史研究会 茂原市在住)農業視察でメキシコを訪問の際、岩井敏夫町長はアカプルコ市長あてのメッセージを託す。町長のメッセージに感銘を受けたアカプルコ市長からアカプルコ市の紋章が贈られる。メキシコ大使館・バード参事官から手渡される。紋章には「光はアカプルコから 友好の記しに」と表現されている。
- 1976.9.8～9.18 「商工会青年部御宿一アカプルコ友好親善民間使節団」一行12名が訪墨、アカプルコ市長を表敬訪問。メキシコ在住の東信行氏の尽力により独立記念祭に大統領に謁見。「アカプルコ御宿港湾姉妹都市」の町長あてメッセージを託される。
- 1977.10.2 駐日メキシコ大使ハビエル・オレア・ムニョス閣下一行24人が記念碑を訪れる。メキシコ塔改修の大理石を本国大統領から贈呈してくれるよう依頼。
- 1977.12.13 メキシコ政府の意向により塔改修よりメキシコ風庭園を造るために資金援助を約束される。
- 1978.1.17 メキシコ国から建設大臣顧問建築技師ホルヘ・カンパサーノ氏が来町し、公園整備の打ち合わせが行われる。
- 1978.3.3 日本政府がメキシコ国に贈った漁業訓練船オンジユク丸の引渡式が、三重県伊勢市で行われ、岩井町長が出席。
- 1978.5.28 御宿海のカーニバルを開催、メキシコ大使のご厚意によりマリアッチが参加
- 1978.7.31～8.12 第15回国際姉妹都市会議がメキシコ・クエルナバカ市で開催、岩井町長、岩崎栄一郎議長が出席。
8.7アカプルコ市と姉妹都市協定を締結。ホセ・ロペス・ポルティエリョ大統領を表敬訪問。
- 1978.9.7～9.19 商工会青年部友好親善民間使節団訪墨、一行12名、大統領アカプルコ市長を表敬訪問。
- 1978.11.1 ホセ・ロペス・ポルティエリョ大統領来町。完成したメキシコ公園でテープカット。青年団のかつぐ神輿に乗せ歓迎。
- 1979.2.11 ロドリゴ駅伝(夷隅一週駅伝)を開催(以来毎年2月に開催)
- 1982.4 アカプルコ委員会が発足(友好親善の推進)



- 1985.8.10～11 アカプルコ市長一行14名が来町
 1985.10.24 9.19メキシコをマグニチュード8.2という大地震が襲い、渡辺委員長(岩和田区長)がアカプルコ災害救援特別委員会からの義援金をメキシコ大使に手渡す。個人2,208名、25団体、186万1,728円。
- 1988.7.18 日墨修好百周年記念式典が都内で開催。宇野外務大臣からメッセージを託される。
- 1988.8.3～8.5 マリガンテ号寄港 日墨修好百周年を記念してアカプルコ湾を出発して日本を訪れた。船長ビダル・アルサル船長から滝口町長へ航海安全の守り神マーメイドが贈られる。
- 1988.9.7～9.18 メキシコ友好親善視察使節団 団長滝口町長 16名参加、ロペス元大統領、ペドロ・オヘダ漁業大臣、レオドレス・ルイス大統領補佐官に謁見。アカプルコ市長イスラエル・サベラニス・ナグエダ氏を表敬訪問。
- 1988.10.16～17 メキシコ文部省親善訪問団、アントニオ・エルナンデス小学校局長を団長とする13名が来町。御宿小学校で公開授業の見学や音楽集会で児童交流が繰り広げられる。
- 1989.10.11～10.22 メキシコ友好親善使節団 団長佐藤高二議会議長 総勢15名参加
- 1990.10.15～10.24 アカプルコ友好親善視察使節団 団長吉田庸二収入役 総勢14名参加
- 1992.7.16 レネ・ポアレス・アカプルコ市長を表敬訪問。メキシコ・ラサール大学エストゥーディアンティーナ合唱団、日本とメキシコの文化交流使節団来町。月の沙漠記念館屋外ステージでコンサート開催。
- 1994.7.23 アチャイ・メキシコ民族舞踊団御宿公演がラビドールホールで開催。
- 1994.7.27～ この年から毎年メキシコ少年野球団ホームステイを受け入れる。
1996. 8 ロペス通り記念碑建立
- 1997.10.4～5 御宿町商工会主催「メキシコ輸入品フェア」を開催
- 1997.10.13～10.22 アカプルコ姉妹都市友好親善使節団 団長伊藤町長 総勢17名参加
 アカプルコ市長に表敬訪問し、アカプルコ市内に御宿—アカプルコ記念碑の建立を依頼する。
- 1998.7.19 日西墨三国交通発祥之碑建立70周年記念式典開催。ウンベルト・コラールアカプルコ市長代理、エンリケモラーレス駐日メキシコ大使館報道官、沼田県知事、森英介衆議院議員参加。
- 1999.1.28～2.13 メキシコ現地視察研修(職員海外研修派遣)
 日・墨国際交流に息づく御宿(メキシカンビレッジ)基本構想に関する基礎資料の収集、姉妹都市交流の充実(アカプルコ市長表敬訪問)、メキシコ製品の市場調査等のため、プロジェクト委員会から職員2名派遣
- 2002.3 メキシコ記念公園休憩所の改修(千葉県・関東ふれあいの道整備)
- 2003.3 大宮寺発掘調査に着手
- 2004.7 アカプルコ使節団(6名)来町 アカプルコ市長の親書を受領
- 2004.8.9 日本ともだち協会(アカプルコ市民)アレックス他5名来町
- 2004.10.10 キンタナルー社会通信局員(5名)来町
- 2005.3.24 アカプルコ市民、清水氏他3名来町
- 2005.9.15 アカプルコより清水氏他4名来町
- 2006.12 田辺光宏氏講演会開催
2007. 6 400周年記念事業企画実行委員会設置
2007. 9.8～9 黒沼ユリ子料理教室・メキシコ文化交流会・ヴァイオリンリサイタル開催(ルイス・カバーニャス・メキシコ大使ご夫妻 堂本知事他)
2008. 10.4 ○ 川上ミネ ピアノコンサート開催(セゴビア・スペイン公使他)
2008. 10.5 「伊勢えび祭り」・「ふるさと満喫フェア」を開催(メキシコ大使、スペイン公使他)
2009. 6.12 メキシコ合衆国海軍練習帆船クアウテモック号来航
2009. 9.17～12.8 400周年記念公募展
2009. 9.26 ② 日本メキシコ交流400周年記念祭(皇太子殿下、メキシコ大使、スペイン大使他)
2009. 10.11 東信行氏他在墨日墨協会 10名 メキシコ松200本植樹
2010. 1.16 メキシコ音楽祭2010 黒沼ユリ子コンサート



周知啓蒙活動

土屋武彌（日墨 400 周年企画実行委員会委員）

1. 日本における活動

(1) ドン・ロドリゴ滞在神社で日墨友好結婚式

- ①開催日 2010年5月29日
- ②内 容 アレハンドロ・バサーニャスさん（駐日メキシコ大使館・元文化担当官）と日本人の程野和美さんのお二人のたつての希望により岩和田の大宮神社で挙式。地元住民のほか多数の方々が参加、祝福。
- ③場 所 御宿町岩和田 大宮神社
- ④参加者 約300名

(2) 千葉市民文化大学講座

- ①開催日 2010年6月4日
- ②内 容 (イ)「日墨交流400年の軌跡」柳沼孝一郎氏（神田外語大学・教授）
(ロ)「御宿町と日西墨400周年記念事業」土屋武彌氏（サンフランシスコ号漂着400周年、日西墨三国交通発祥記念之碑建立80周年—企画実行委員会委員）
(イ)は、1609年の漂着救出から現在に至る日西墨交流の軌跡を辿る講演。
(ロ)は、御宿町が開催する記念事業の啓蒙活動。
- ③場 所 千葉市民文化センター
- ④参加者 約100名

(3) 講演会「メキシコを知ろう！今日のメキシコは」

- ①開催日 2010年8月7日
- ②内 容 河嶋正之氏（JETRO・前メキシコ所長）
メキシコ合衆国の概況（一般状況、政治体制、政治・経済動向、日本との経済関係等）を多岐に亘り講演。
- ③場 所 御宿町役場 大ホール
- ④参加者 約70名

(4) 「フィエスタ・メヒカーナ～2010」に出展

- ①開催日 2010年9月25～26日
- ②内 容 400周年記念と友好交流事業の啓蒙活動と御宿町の広報活動。
- ③場 所 東京都港区 台場
- ④参加者 約50,000名

(5) 「日西墨友好の絆記念日」の各種事業

- ①開催日 2010年10月3日
- ②内容 「友好の絆記念日」を9月30日に町条例制定により、関連事業として、「サンフランシスコ号追悼式」、「日西墨三国文化交流イベント」を開催。
- ③場所 (イ)日西墨三国交通発祥記念之碑前広場
(ロ)月の沙漠記念館屋外イベント広場
- ④参加者 約400名

2. メキシコにおける活動

(1) ドン・ロドリゴの生誕地テカマチャルコ市と霊廟サンフランシスコ修道院を初訪問

- ①訪問日 2010年9月14日
- ②内容 (イ)テカマチャルコ市を訪問、歓迎式典と友好交流。
(ロ)サンフランシスコ修道院で献花式。400年間不明であった墓が、祭壇の下の穴から人骨を発見。メキシコ国立人類学博物館の調査報告を待つ。
- ③場所 プエブラ州テカマチャルコ市
- ④参加者 約3,200名

(2) 在墨日系人との友好交流会を開催

- ①開催日 2010年9月15日
- ②内容 御宿町主催、日墨協会協賛、御宿アミーゴ会企画によるメキシコで初めての親善パーティー。
- ③場所 メキシコ市 日墨文化会館
- ④参加者 約150名

(3) 「日墨交流400周年記念企画展」開催

- ①開催日 2010年9月15日～10月26日
- ②内容 (イ)御宿で開催した日本及びメキシコからの公募入選作品展(テーマ:愛)。
(ロ)異国日本で祖国を思うロドリゴ展
短歌と掛軸 — 大野興風氏、高橋美香子氏の協作創作。
人形(家康とロドリゴの会見場面)、(海女決死の遭難者救助の場面) — 藤田邦子氏作
- ③場所 メキシコ市 日墨文化会館
- ④来場者 約600名

(4) 友好姉妹都市「アカプルコ」友好交流

- ①開催日 2010年9月17日
- ②内容 アカプルコ・御宿姉妹都市歓迎式典

③場 所 アカプルコ市庁舎、国際交流センター、日本の広場

④参加者 約 300 名

(5) 黒沼ユリ子さんの招待コンサートと交流パーティー

①開催日 2010年9月19日

②内 容 音楽親善大使であり、御宿アミーゴ会特別会員の黒沼ユリ子さんより使節団一行に対し、コンサートとパーティーの招待をいただく。

テノール歌手 アンヘル・ルスさん、ピアニストのジェームス・デムスターさんが友情出演。

③場 所 クエルナバカ市 黒沼ユリ子邸

④参加者 約 50 名

(6) 「日墨交流 400 周年～交流の軌跡展」に出展

①開催日 2010年9月20日

②内 容 駐墨日本大使館主催の要請に出展

(イ) 「サンフランシスコ号漂着乗員遭難救助図」

(ロ) 「日西墨三国交通発祥記念之碑」プレート

(ハ) 400周年にメキシコ国より寄贈されたブロンズ像「抱擁」のプレート

③場 所 メキシコ市 国立人類学文化博物館

④参加者 多数

— あとがき —

本事業は日本財団の助成支援により行われたもので厚くお礼を申し上げます。

主事業の調査報告書の編集は、柳沼孝一郎氏（神田外語大学教授）に主筆として、「日墨400周年の軌跡」を執筆いただいた。氏は7月にスペイン・セビリャに渡り、400年の友好に深く関係するフィリピンとスペイン調査の構想に道筋をつけ、8月にはメキシコに行き12月まで現地で研究活動の傍ら、9月の御宿町訪墨団がテカマチャルコへ初訪問の友好式典には通訳としてご尽力をいただいた。帰国直後に自信の原稿の他、報告書全体を纏めていただいた。「甦るドン・ロドリゴの生誕地と霊廟」は、誰も語られることがなかった場所で、資料も情報も極めて乏しい中で、テカマチャルコに長年在住し、元市長の姻戚河東田清俊氏（テカマチャルコ工業大学元教授）に現地情報をいただき、土屋武彌氏（400周年記念事業企画実行委員、御宿町国際交流協会理事）が纏めた。森良和氏（玉川大学准教授）は、「初めて太平洋を渡った日本人」と題して、1580年代に2人の日本人（スペイン名をクリストバルとコスメ）が太平洋ばかりかインド洋、大西洋の世界周航9割を達成した、戦国の日本から世界を駆けた日本人青年の壮大な物語を執筆された。大野幹雄氏は「サンフランシスコ号 Q&A」と題して、現代に生きる人々が誰もが知りたいと思う遭難当時の様子を、自身の長年の外国航路大型船の船長経歴を通して、平易にして興味をもつQ&A形式で執筆していただいた。「ドン・ロドリゴがスペイン国王に送った岩和田の報告」は大垣貴志郎氏（京都外国語大学）の翻訳書 日本見聞記の部分よりご協力をいただいた。「日西墨比の四カ国」対象の調査報告書は膨大且つ広範に亘ることから、2010年度はメキシコを対象とすることで日本財団の了承をいただき、フィリピンとスペインは次に行うことにした。

第二の周知啓蒙活動は、日本で5回、メキシコで6回と日墨両国での活動は大成功であった。夫々の活動には日墨両国で大変多くの協力をいただいた。ミゲル・ルイス・カバーニャス閣下（駐日メキシコ大使）、アレハンドロ・バサーニャス氏（駐日メキシコ大使館元文化担当官）、ルールデス・ソサ（駐日メキシコ大使館一等書記官）、イネス・サトウミノ・ロペス・ボンセ氏（元テカマチャルコ市長）、ラミレス氏（テカマチャルコ新市長）、アビラ・サンチェス氏（アカプルコ市長）、セフェリノ氏（ゲレロ州知事）、アレックス氏（アカプルコ・日本ともだち協会会長）、セルヒオ・ゴンザレス氏（元駐日メキシコ大使）、小野正昭閣下（駐メキシコ日本国大使）、高瀬公使、大野一等書記官、大熊徹氏（メキシコ日本文化センター所長）、菅原譲治氏（日墨協会会長）、中畝明氏（同協会事務局局長）、東信之氏（同協会国際部長）、日墨協会事務局の皆様、遠藤滋哉氏（アミーゴ会・メキシコ代表）、猪股せい子氏（御宿アミーゴ会幹事）、黒沼ユリ子氏（アカデミア ユリコクロスマ代表）、鴻巣勝男（メキシコ-日本アミーゴ会幹事）、鈴木松男氏（ミカドトラベル会長）、石田義廣氏（御宿町長・メキシコ友好親善使節団長）、柳沼孝一郎氏（前記）、大野興風氏（白沙の会代表）、河東田清俊氏（前記）、藤田邦子氏（人形作家、白沙の会会員）、高橋美香子氏（白沙の会会員）、御宿アミーゴ会様、メキシコ-日本アミーゴ会様、吉野信次氏（御宿町産業観光課）、千葉県国際室の櫻井氏他ご協力をいただいた皆様に深く感謝の意を表します。

2011年3月

御宿国際交流協会／編集委員会